大日本地震史料　卷之五　自慶長元年至正保四年

慶長元年閏七月九日甲辰、豐後、薩摩、地大ニ震ヒ、府内近傍ハ、海嘯暴溢ス、是日、京都モ震ヘリ、

〔言經卿記〕

文祿五年〇慶長元年潤七月九日甲辰、天晴、戌刻地動、

〔孝亮宿禰日次記〕

文祿五年〇慶長元年閏七月九日天晴、酉戌刻間有地震、

〔薩藩舊記後編〕

樺山紹劍自筆

閏七月九日、薩摩ハ大地震也、京都ハ十二日之夜也、〇前後略ス、

〔由原宮年代略記〕豐後大分郡八幡村柞原八幡社藏本

慶長元年丙申閏七月九日、戌刻、大地震、當社拜殿回廊諸末社、悉顚倒畢、又此日、府中洪濤起テ府中並近邊ノ邑里、悉成海底、黃昏時分也、同慈寺本堂斗相殘ル、大波至三、

〔讃岐大日記〕

慶長元年壬七月十二日之夜大地震、山崩地裂、白水涌出、其餘波四五十日不止、斯時豐後國府内、大地沈落成蒼海、其方一里有半矣、

〔梅園拾遺〕

ちかく慶長元年の七月〇閏七月ナリ大地震、速見高碕山なども石崩れ落ち、火出たるよし、府内の記事に見えたり、この時、かのあたり人七百餘も損じたりとあり、

閏七月十二日丁未、山城、攝津、和泉等諸國、地大ニ震ヒ、伏見城天守崩壞シテ壓死者甚ダ多シ、餘震歲ヲ越エタリ、

〔義演准后日記〕

文祿五年〇慶長元年閏七月十二日、霽今夜丑剋大地震、禁中御車寄其廊顚倒、南庭上ニ敷御座、主上行幸云々、京都在家顚倒、死人不知其數、鳥部野煙不斷、東寺事、食堂、同中門、講堂、灌頂院、南大門、北八足門、東小門、鐘樓、此分顚倒、塔婆、鎭守八幡宮御影堂、同四足門、同唐門、灌頂院ノ門二宇、慶賀門、寶藏幷不開門、穀屋之内少々相殘、此分無爲不顚倒、其外四方ノ築地悉崩、但少々相殘所モ在之、塔事、去文祿二年、檀主大政所、秀吉公母公興山上人奉行出來了、〇中略今度數宇顚倒、塔婆一基相殘、高運至、併大師御納受、無疑々々、東北角礎三寸バカリニエ入、雖然塔無爲、四方之石壇之石少々倒、御影堂事北方ヘユガミ了、西院ノ南軒、檜皮少々損、棟木一所損、其外無爲

珍重、御供所ユガミ了、雖然無爲、築地崩、四足并唐門無爲、鎭守事聊モ不損、珍重々々、隨心院門跡事、近年當寺北八足門ノ西方ニ建立之、今度悉顚倒、觀智院堂、瓦葺、同臺所顚倒、凡相果了、寶嚴院藏堂以下顚倒、寶泉院殿瓦葺顚倒、寶芥院臺所倒、其外坊々大破、或顚倒、委不及記之、大佛事、堂無爲、奇妙々々、本尊大破、左御手崩落了、御胸崩、其外所々響在之、後光聊モ不損、中門無爲、但四方角柱少々サクル、其外無異儀、三方之築地悉崩、或顚倒、妙法院門跡、廊顚倒、照高院臺所少々損、大佛供養延引、寸善尺魔歟、

伏見事、御城御門殿以下大破、或顚倒、大殿守悉崩テ倒了、男女御番衆數多死、未知其數、其外諸大名ノ屋形、或顚倒、或雖相殘、形計也、其外在家爲體、前代未聞、大山モ崩、大路モ破裂ス、非只事、

十四日、霽、地震未休、諸人不安堵、家ヲ去テ道路ニ臥也、今日夜中、大佛東寺爲見舞發足、仰天不斜、委如右記、歸路ニ伏見ヘ越了、言語道斷次第也、全所一所モ無之、諸人猥雜、大路難通路體也、大地裂テ落入了、

傳聞、唐人堺津ニ逗留、大略地震ニ死去云々、實說歟、追而可記之、

十五日、少雨灑、地震今夜以外也、暫時モ不休、京都方々ヘ爲見舞愚札遣之、伏見御房方ヘ同前、

傳聞、主上于今庭上假屋ニ御座云々、

傳聞、今度來朝唐人モ、下人少々地震ニ死云々、

十六日、霽、地震不靜、昨日ヨリモ猶動ス、諸人家內ニ不居、夜ハ道路ニ臥ス、主上于今庭上ニ假屋ヲ搆テ御座云々、伏見太閤、同假屋ニ御渡云々、

十七日、地震猶動ス、

東寺寶嚴院法印ヘ、愚狀並糒袋音信遣之、

今度當寺諸伽藍顚倒、不慮之爲體見及、仰天催愁淚歎入候、殊當職中、凶事出來、不運至極、無念淺間敷候、各坊舍大破、是又咲止、旁絕言語候、能々歸寺傳達所希候、只期再興之時入口候也、

後七月十七日　判

表書　寶嚴院印トバカリ也

同上人ヘ遣ス、糒袋同遣之、

先日は東寺入來之由、不及拜顏、遺恨、抑東寺伽藍、凡無殘所顚倒爲體、密法零落、歎入存候、拙身不運至、心中程可有御推量候、先々高野山無事候哉、是又別而無御心元候、只上人御再興之方便、約所仰候、尙敷事、重而可申事候、敬白、

後七月十七日　判

表書　興山上人御房　　義演

高野一山無爲之由、上人返事、先安堵也、但大塔ノ九輪クサリ四筋共ニキル、ト云々、猶重而可尋遣之、南都諸伽藍無爲云々、比叡山同前、先珍重々々、東寺伽藍不取置云々、先假屋作テ、破裂ノ本尊共可奉安置事歟、追而可仰遣之、

十八日、今日爲大地震御祈綸旨到來、奉行柳原也、彼綸旨云、
就大地震、御愼不淺候、御祈事、撰良辰一七ケ日、可被丹誠之旨、天氣所候也、
以此旨可令申入三寶院准后給、仍執達如件、
後七月十七日　　權右少辨資淳
謹上　中納言僧都御房

廿日、朝雨降、午刻屢晴、殘暑甚、地震兩度以外動、其外ハ聊ユル也、

廿一日、霽、地震、去十三日ヨリ至今日不休、禁裏樣、南庭ノ假御殿ニ未御座云々、伏見太閤、同假屋御渡云々、

廿二日、霽、地震猶動ス、

廿三日、晴、地震今夜兩度以外動ス、

廿五日、陰、地震動了、去十九日ヨリ御祈、今日結願、山上山下御卷數二枚、同自分合三枚、奉行柳原辨ヘ遣了、

廿六日、雨降、地震未刻以外動、其外少動度々也、

廿七日、午刻屬晴了、地震又動ス、

廿八日、地震以外動搖了、

廿九日、地震今日は聊ユルキ也、

八月二日、雨降、地震不休、

三日、細雨灑、地震今日ハ少動ス、珍重、

四日、霽、地震今夜又事外動ス、

五日、地震以外也、

六日、晴、今夜戌刻ヨリ丑半刻マデ大雨大風、小座敷コケラ葺吹破、洪水、地震ユラズ、珍重々々、

七日、晴、地震一度動ス、

八日、晴、地震不動、珍重々々、

九日、晴、地震大動靜リ、但聊動ス、珍重、

十一日、霽、晩雷電夕立、地震不動、

十二日、地震動ス、○中略去月今夜大地震也、諸人可思出歟、東寺伽藍顚倒之儀、德善院法印ヘ爲寺家、昨日談合云々、晦日、霽、地震動搖、東寺伽藍顚倒材木共、興山上人、高野衆ニ申付取置云々、仍今日寶泉院並寶嚴院ヘ、以治部卿法眼奉書見舞ニ遣候、千手不損云々、其外本尊餘以不損云々、珍重珍重、西院ヘ悉奉入之云々、

十三日、地震聊ユル也、珍重々々、

十七日、晴、地震同前、

十八日、晴、戌刻地震以外也、珍事々々、

十九日、霽、地震不動、但聊音アルカ、
廿二日、地震不動、珍重々々、
廿三日、晩陰、地震兩三度動ス、今日ハ以外也、
廿四日、雷電雨降、地震夜前動ス、
廿七日、深更雨降、地震丑刻動ス、
晦日、霽、地震動搖、
九月十二日、及晩雨降、地震動ス、自先度凡不休、不思議々々々、
廿日、地震動ス、
廿二日、天快晴、從東寺光明院、寶芥院兩人來、爲寺家樽二荷三種進上、今度地震顚倒伽藍之儀申入了、
廿六日、陰、午剋地震、凡先度以來不休、珍事々々、
廿七日、晴、從東寺伽藍顚倒ニ付、先度年預來、禁裏ヘ御案內之儀、爲長者可奏聞之由、爲寺家申入候間、則東寺ヘ題目猶令衆議可申入之旨、今日治部卿以書狀申遣處、令衆議、自是御返事可申入旨返答了、
十月六日、昨日東寺ヨリ禁中ヘ御奉加、並諸末寺ヘ奉加之綸旨之事可申由、返事在之、
七日、陰、東寺申禁裏御奉加並綸旨之事、德善院ヘ以愚札仰了、
就東寺諸伽藍顚倒之儀、從禁裏御奉加、並眞言諸末寺江奉加之事、爲當門禁裏ヘ可申入之由、自東寺歎入候間、先得貴意事候、可有如何候哉、萬端可然樣御沙汰所希候、爲其申入候、穴賢々々、

九月七日（十カ）　判

德善院御房

十一日、晴、德善院東寺奉加之返事、今日寺家ヘ以治部卿法眼仰遣了、當時諸國所々末寺々領簡略時分、奉加不可然之由也、禁裏ヨリ御奉加之儀ハ可申入由也、
十六日、及晩小雨降、地震少動、
廿七日、地震動ス、以外也、
十一月廿日、今夜地震以外也、
廿二日、晴、地震□以外也、
廿七日、霽、地震以外也、
廿五日、亥剋地震以外也、
十二月九日、晴、○中略德善院ヘ以愚札仰遣了、並東寺奉加、禁裏樣ヨリ被仰付候樣にと、同仰遣候、菓子折一折遣之、
二年正月十八日、陰晴不定、戌刻地震動ス、
正月十九日、陰、巳半刻地震、凡去年已來不休歟、珍事々々、
四月廿八日、陰、地震少動、
五月三日、晴、寅刻地震以外也、

十日、陰晴時々不定、地震動、

〔文祿大地震記〕醍醐三寶院藏本

大地震記

文祿五年歲次丙申閏七月十三日、今夜丑剋大地震、

禁中御事

十三日、辰剋理性院使者來、此中在京云々、今夜地震、其砌禁中ニ祗候、理性院モ御座以下相運、　主上南庭行幸、庭上ニ儲御座御渡リ云々、御車寄之廊顚倒、其外築地瓦少々損云々、先以珍重々々、勸修寺大納言幷長橋御局ヘ、爲御見舞以使者申入了、

伏見城事

十三日、丑刻大地震、御城大殿守顚倒、幷御殿御門以下顚倒之由、同丑半剋斗御普請衆ヘ方々ヨリ注進、則治部卿法眼相副遣之、則時罷歸、同由申、仰天、其後重而對馬、德善院ヘ爲見舞夜明テ遣之、德善院所モ殿以下悉大破、門顚倒云々、下人少々ウタレテ死云々、御城番衆一庵法印、其外一到衆數多、門矢藏顚倒シテ材木ニウタレテ死去云々、

太閤御所幷若公無爲、珍重々々、諸人猥雜以外之體云々、今日ハ庭上假屋被構御渡リ云々、地震暫時モ無休事、萬人握掌不安穩、

大佛殿事

十四日、霽、夜中予罷向了、大佛本堂無爲、聊モ不損、礎所ニ依テ二寸バカリニヱ入也、本尊ハ大破也、左ノ御手摧テ落ル、御胸同前、其外無爲歟、雖然、木ヲ以テ骨トナシ、其上ヲシツクイニテ塗タリ、其上ヲ漆ニテヌリテ、金薄悉押ス、大地震ユリタキマヽユリ摧タル間、假令氷タル壁ノゴトク見了、既來八月十八日、供養トテ各用意處、誠寸善尺魔、佛法破滅之相也、中門無爲、但四角柱少々裂バカリ也、其外聊以不損、先以珍重、三方ノ築地崩或顚倒、既以大石ユリ倒了、

東寺事

從大佛直入寺了、昨日十三日、早々治部卿書狀ヲ以テ、東寺伽藍之式尋遣候處、以外之由返答、依之頓今日發足了、堅固內々體也、

先食堂　講堂　灌頂院　南大門　北八足門　東口門　食堂　中門　鐘樓　湯屋、凡此分顚倒、殊食堂ハ大師以來不改伽藍也、此度倒、愁涙千行々々、本尊モ定破裂シテアル覽、伽藍ノ倒タル體如山、寺家ノ諸役人モ、私宅悉倒タル故、無人テ取ヲキモ曾以不罷成由、寶嚴院物語、當年預也、

塔婆　御影堂　鎭守　慶賀門　寶藏　不開門　灌頂院門二宇　西院四足門幷唐門　穀屋內少々、此分無爲、御影堂モ損

了、然モ不顛倒、珍重々々、今日開內陣、大師御前、法施伽藍建立懇祈之外無他、塔婆事、文祿二年造畢、檀主大政所、秀吉公母公、奉行高野興山上人應其、同三年七月廿二日塔供養、舞樂蔓タラ供、導師予、職衆四十口、無爲執行、爰今度免大難、自愛、但東并北礎三寸バカリニヱ入了、雖然無其失、瓦ニ至マデ聊不損、珍重々々、抑予當職之內、大凶事出來、不運之至、戒行拙所、歎テモ餘アリ、無念々々、

十五日、小雨灑、地震不休、如踏薄氷、

伏見向野、川中也、當春ヨリ御普請、石クラ等凡出來、地震二間余大地ヘユリ入リ云々、依之昨日十四日、伏見山ノ巔ニ御綱張被仰付、奉行衆罷越云々、昨日彼跡デ風聞治定之由、

今日天ヨリ白毛降云々、誠方々ヨリ持來、惟異非尋常、去六月廿七日、砂降テ草木ノ葉如霜、無幾程今度大地震、凶事出來、諸人宅倒、萬人死、諸寺法祇、無殘所顛倒、佛法王法可滅盡前表歟、傳聞、主上于今庭上假屋ニ御座云々、

十六日、霽、地震不休、昨日ヨリモ倍增ス、仍伏見方々ヘ卷數遣之了、披露處、御祝着之由返答、

十七日、地震猶動ス、寶嚴院法印ヘ伽藍顛倒爲見舞愚札遣之、興山上人同前、

興山狀云

東寺ヘ御成之由承候條、驕而致參上候へば、はや還御にて殘多存候つる、塔之御いはり惣之垣一切經などほり出候て罷歸候つる、高野之儀無相違候、五袋被下忝存候、可然之樣賴入候、恐々謹言、

後七月十八日　木食應其

治部卿殿

從　門主樣御懇之御書成被下、殊更重寶候、別忝次第候、先度早々御成之由、惣寺申聞候之處、各忝候由、急度御禮可申上之由候へ共、手前取亂遲々非本意候、諸伽藍及顛倒候へ共、鎭守御影堂堅固候之間、先以成安堵之思申候、時刻到來候ば、諸堂又可有再興候之間、萬端御祈念奉仰候、尙以御書之通令披露、致祇候可得尊意候、此等之趣可然之樣御取成所仰候、恐々謹言、

閏七月十七日　空盛判

治部卿法眼御坊　寶嚴院空盛

愛護一山坊(宕)令悉顛倒、無殘所云々、諸大名茶壺摧テ成微塵了、近年當山ニ上置故也、

高野山無爲、安堵珍重、大塔九輪ノクサリ四筋共ニキル、ト云々、南都諸伽藍モ無爲云々、

天龍寺悉顚倒候了、嵯峨二尊院近年繁昌、是以顚倒候了、
大覺寺門跡、御殿以下倒候了、
東福寺、一寺凡無爲、但二王門顚倒、其外少々倒歟、泉涌寺無爲云々、珍重、卅三間堂無爲、奇特々々、清水寺無爲、但廻廊谷ヘ倒候了、
大佛ノ妙法院門跡廊倒、太閤御新造ノ廊也、
照高院、臺所少々損候了、其外ノ坊々大破候了、因幡堂過半倒云々、猶追て可尋記了、六角堂無爲歟、其外京都淨土寺、法花寺、悉瓦葺分顚倒、
十八日、雨降大風、地震動、但聊ユルキ歟、
爲大地震御祈、奉行柳原權右少辨資淳ヨリ綸旨到來、寺務代理性院ヘ寫テ遣之、山上山下ヘ寺務代相觸了、松橋水本良家衆ヘハ、門跡ヨリ直ニ綸旨ノ寫遣之、例式也、
理性院地震以來在京、今日歸寺候了、理性院申入職掌、驗地以來不罷出、如何可申付哉云々、返答猶堅可被申付、其上可有御談合云々、

占文云

今月十二日、子之時大地震有音、傍通女宿、帝釋所動也、
天文要決云、地震、陰盛陽衰起也、
內經云、兵起愼、
六甲云、讒言起、賢人退、小人進、
又云、人民病災起、
又云、大動爲大因也、

文祿五丙申年閏七月十五日

正五位下行大藏大輔博士賀茂朝臣在昌

傳聞、禁裏御對屋、并女御々座殿、并御臺所以下ノ瓦、悉ヲロスト云々、今度地震ニ顚倒、瓦葺ノ故ト云々、諸方此分也、伏見御城モ瓦葺御禁制御觸云々、
十九日、霽、風□、地震兩度、以外也、其外聊ユル也、
廿日、朝雨降、午剋屬晴、地震不休、殊今日兩度以外也、其外ハ少々動ス、
廿一日、霽、地震今夜兩度以外動ス、去十三日ヨリ至今日、其聲不休、諸人家ヲ去テ道路ニ夜ル臥云々、
禁裏樣、南庭ノ假御殿ニ未御座ニ候、
廿二日、地震同前、
廿三日、地震今夜兩度カ以外也、但マトヲ也、何日カ可安堵哉、不思議々々々、
廿四日、地震同前、
廿五日、同前、
廿六日、兩度以外動ス、

廿七日、陰、猶動ス、不思議々々々、
廿八日、地震今日ハ例ヨリモ大地震也、
廿九日、今日ハ地震事外ユルキ也、珍重々々々、
八月
朔日、地震同、
二日、雨降、地震不休、
〔言經卿記〕
文祿五年○慶長元年潤七月十三日戊申、天晴、大地震子刻、去夜子刻大地震、近代是程事無之、古老之仁語之、小動不止、晝夜不知數了、
地震ニ付而、方々ヨリ見舞人々來了、
一地動ニ相損所々、先私宅ユガミ了、庭上ニ出デ夜ヲ明了、
當所ニハ川野口兵衞、大野伊兵衞等家顚倒了、其外大破ニ及了、
一寺內ニハ門跡御堂、興門御堂等顚倒了、兩所ニテ人二三人死去了、其外寺內家大略崩了、死人三百人ニ相及了、全キ家一間(軒)モ無之、
一上京ハ少損(了カ)し、下京ハ四條町事外相損了、以上二百八十餘(三カ)人死也云々、東之寺も瓦ブキハ崩了、
一禁中ハ少々相損也云々、
一伏見御城ハテンシユ崩了、大名衆家共事外崩了、江戸內府ニハ、ナガクラ崩了、加々爪隼人依死去了、雜人ハ十餘人相果了、同中納言殿ニハ、侍共ハケガドモ有之、死者無之、但雜人ハ六七十人死也云々、其外町々衆家崩候て、死人千ニアマリ了、
一東寺ハ塔、鎭守八幡社、大師堂、此外七ツ崩了、但坊々不苦也云々、
一大佛ハ堂ハ不苦、但柱ヲ二寸程土ヘ入了、御佛ハ御胸ヨリ下少々損了、樓門ハ戌亥方ヘ柱ユガミ了、
一三十三間(堂脫カ)ハ少ユガミ了、
一東福寺ハ本堂年來東ヘユガミ了、此度地動ニ西ヘ相直也云々、奇特了、伽藍トモ不苦了、但堂々(之カ)東寺相損也云々、
一山崎、事外相損、家悉崩了、死人不知數了、
一八幡在所、是又悉家崩了、
一兵庫在所崩了、折節火事出來候、悉燒了、死人不知數了、
一近江國ヨリ關東ハ、地動無之云々、
一アタゴ坊、坊六有之、悉顚倒了、少々小座敷相殘了、權現相殘了、少々人相損了、
一和泉堺、事外相損、死人餘多有之云々、
一大坂ニハ御城不苦了、町屋共大略崩了、死人不知數了、

十四日己酉、天晴、地動晝夜及度々、方々見舞ニ使來了、
十五日庚戌、小雨、小地動晝夜及度々、方々ヨリ見舞ニ使來了、
同日、地震ニ付而、毎日雜說有之、又大地動可有之旨沙汰有之、各女子ワラベドモ也、夜ハ盜人用心トモ、寺内ニハ夜眠トモ稀也云々、
同日、地動ニ付而、去十三日ヨリ哥ドモ有之、門々押之也、誰人ノ所意不知之ドモ、町々押之、松竹ノ葉ヲ同サシ了、
ム子ハ八ツ門ハ九ツ戸ハ一ツ、身ハイザナミノ門ニコソスメ、
チハヤフル神ノイガキモ三日月ノ、ユリヤナヲサン我身成リケリ、
ユルグトモヨモヤヌケジトカナメ石ノ、カシマノ神ノアランカギリハ、
十六日辛亥、小動晝夜及度々、晴、地動又有之由雜談候而、大野伊兵衛尉後園草屋竹ノ邊也、其ヘ予、北向、阿茶丸、□□家中衆、悉罷向了、無何事了、後刻チマキ、同妻持來了、
同日、石河日向守ヨリ見舞ニ使來了、
同日、方々見舞ニ人來了、
同日、下女ツル父、堺ヨリ上洛候、一昨日下也云々、來(マ)候、冷泉女中、十二日夜大地動ニ家顚倒ニ付而死去也云々、廿四歳也、絶言語了、子息二人ハ無異議也云々、
十七日壬子、天晴、地震少々、晝夜及度々、有減增、四條、堺ヨリ上洛了、冷(泉カ)、事如昨日聞候、愁傷也云々、
十八日癸丑、雨風、小動了、
廿日乙卯、天晴、小動了、
廿一日丙辰、天晴、小地動、增減不定、
廿二日丁巳、天晴、小動了、
廿三日戊午、天晴、小動了、月齋ヘ書狀遣了、先日書狀遣了、地震見舞ニ及返事候、内府ヘ取合事申遣了、
廿四日己未、小雨、小動了、伏見ヘ發足了、内府ヘ罷向對顏了、先度地震之事共相尋了、次同黃門ヘ罷向、所勞にて不及對顏了、改衣裳歸宅了、
廿五日庚申、晴陰、小地動了、
廿六日辛酉、雨、小動了、
廿七日壬戌、天晴、小動了、
廿八日癸亥、天晴、小動了、
廿九日甲子、天晴、小動了、
八月一日乙丑、晴陰、小動了、町々夜番有之間、油出候、人ヲ出了、

二日丙寅、雨、小動、少ヅヽ雨フル間、座敷ニ始而各臥了、
三日丁卯、晴陰、小動了、
四日戊辰、晴陰、小動了、夜大雨、雨フル間、座敷ニ臥了、今夜ヨリ臥了、
五日己巳、晴、小動、未刻ヨリ丑刻マデ大風雨、雨風之間、西御方下部助二郎岩等雇了、
六日庚午、巳刻ヨリ天晴、小動了、早朝ニ家ノ損所、少ナヲサセ了、
七日辛未、天晴、地動、此間中々ツヨクナル、
八日壬申、天晴、少動了、少々町夜番ニ人ヲ出し了、
九日癸酉、天晴、小動了、
十日甲戌、天晴、地動了、二度チトツヨシ、其已後少々、
十二日丙子、晴陰、小動了、少夕立雷鳴、
十三日丁丑、天晴、小動了、
十四日戊寅、天晴、小動了、夜小雨、
十五日己卯、晴陰、小動了、
十六日庚辰、天晴、小動了、
十七日辛巳、天晴、小動了、
十八日壬午、天晴、小動了、
十九日癸未、天晴陰、小動了、
廿日甲申、天晴、小動了、
廿三日丁亥、天晴、小動了、晩頭夜雨、
廿四日戊子、朝夕立、雷鳴、晴、小動了、
廿五日己丑、天晴、小動了、
廿六日庚寅、晴陰、小動了、夜小雨、
廿七日辛卯、天晴、小動了、
廿八日壬辰、天晴、少動了、
廿九日癸巳、晴陰、雨、小動了、
卅日甲午、朝陰、天晴、小動了、
九月一日乙未、天晴陰、小動了、
二日丙申、天晴、小動了、
三日丁酉、天晴、小動了、
四日戊戌、雨、小動了、晴陰、
五日己亥、天晴陰、小動了、夜小雨、
六日庚子、天晴、小動了、
七日辛丑、天晴、小動了、
八日壬寅、天晴、小動了、
九日癸卯、天晴、小動了、
十日甲辰、天晴、小動了、
十一日乙巳、天晴、小動了、

十二日丙午、晴陰、小動了、晩雨、暮ニ晴、
十四日戊申、天晴、小動、
十五日己酉、天晴陰、小動了、
十七日辛亥、天晴、小動了、夜雨、
十八日壬子、晴陰、小動了、
十九日癸丑、天晴、晩ヨリ雨、小動了、
廿日甲寅、晴陰、小動了、
廿一日乙卯、雨、晴陰、小動了、
廿二日丙辰、天晴、小動了、
廿四日戊午、天晴、夜小動了、
廿五日己未、朝時雨、晴陰、曉小動了、
廿六日庚申、晴陰、雨、小動晝夜一度ヅヽ、
廿七日辛酉、晴陰、小動、
十月一日甲子、天晴、早曉小動了、夜時雨、
二日乙丑、天晴、早朝小動、
三日丙寅、天晴陰、小動、
四日丁卯、天晴、小動了、
五日戊辰、天晴、小動、
六日己巳、天晴、小動、
八日辛未、天晴陰、小動、

九日壬申、天晴陰、夜雨、小動、
十日癸酉、雨晴陰、小動、
十一日甲戌、天晴陰、小動、
十二日乙亥、陰、小動、
十三日丙子、陰雨、小動、
十四日丁丑、天晴陰、時雨、度々小動了、
十五日戊寅、晴、小動、天晴、
十六日己卯、天晴、小動、晩大雨、
十七日庚辰、晴陰、小動、
十八日辛巳、天晴、小動、
十九日壬午、晴陰、小動、
廿日癸未、天晴、小動、
廿一日甲申、陰、晩雨、小動、
廿二日乙酉、晴陰、晩時雨、小動、
廿三日丙戌、天晴、小動、
廿四日丁亥、晴陰、地動、
廿五日戊子、晴陰、小動、
廿六日己丑、雨、小動、
廿七日庚寅、陰、地動、
廿九日壬辰、陰、入夜雨風、小動、

卅日癸巳、晴、夜雨風、小動、
十一月一日甲午、陰、小動、小雨、晴陰、
二日乙未、天晴、小動、
四日丁酉、天晴、小動、
六日己亥、天晴、小動、
八日辛丑、天晴、小動、
十一日甲辰、天晴、小動、
十三日丙午、天晴、小動、夜雨、
十四日丁未、雨、今曉小動了、
十九日壬子、陰、小動每日也、
廿日癸丑、天晴、小動、
廿一日甲寅、天晴、今曉地動、
廿二日乙卯、晴陰、小動、
廿三日丙辰、晴陰、小動、
廿七日庚申、天晴、今曉小動、
十二月十日壬申、天晴、夜小動、
十一日癸酉、天晴、小動、
十六日戊寅、天晴、夜地震、
廿一日癸未、天晴、小動、
廿四日丙戌、晴陰、霽、夜地震、

二年正月四日丙申、天晴、夜地震、
十一日癸卯、天晴、地震、
十三日乙巳、天晴、夜地動、
十六日戊申、晴陰、地震、
十九日辛亥、天晴、地震、
廿日壬子、天晴、八時地動、
二月二日癸亥、晴陰、地震、
十二日癸酉、天晴、寅刻雷始聲發、小雨、地震、
十四日乙亥、天晴、小動、
廿日辛巳、天晴、今曉小動、後刻度々、
四月大一日辛酉、小雨、午刻ヨリ天晴、小動、
廿八日戊子、天晴、小動、
〔中山家記〕閣本○家記、是月十九日以前ハ散逸セリ、
後七、十九丑、晴、此曉地震甚者也、夜中兩三度許以外動了、
廿寅、雨降、今日地震如昨日、
廿一卯、晴、從曉辰刻許ニ地震十度許鳴動、
廿二辰、晴、曉地震甚者也、初夜時分大地震、御所々樣假屋御寢也、
廿三巳、晴、地震啓動了、
廿四午、晴、地震度々動了、

廿六申、雨降、地震甚動了、令恐怖者也、
八朔、地震度々、
二丑、大雨降、從曉地震數度動了、
三寅、晴、但細雨時々滋了、曉以後地震少動了、
七未、晴、地震曉兩度、辰刻許大地震、
十酉、晴、丑終許地震、寅終許地震兩度、德善院上洛、禁中御見舞被申、其後八條殿御見舞、地震今日四度、事々數候也、
十一戌、晴、地震一度動了、
十二(十三)亥、雨降、卯刻地震、
今日、地震四五度、
抑(十五)今夜々半過地震四度、後一度令鳴動計也、
廿三戌、晴、地震度々、
廿五子、晴、從夜半過地震三度鳴動、
廿八卯、晴、地震夜半過兩度鳴動如例、去月從十二日、今夜迄同前ニ動了、
廿九辰、陰、夜雨、寅刻許地震、夜明方又地震、以上三度鳴動、
十七(九月)亥、晴、今夜地震夜明方迄四度動了、
廿一(廿六)卯、雨降、曉地震、
從申刻許雨降入夜甚、曉大地震、辰刻又地震、
今日(十月四日)、地震四五度動了、
六巳、朝間陰、小雨滋、但屬晴了、大震度々、晝大地震、
地震(八日)云々、
九申、晴、但及晩小雨降、終夜雨、地震一兩度、鳴動度々、
十三巳(子カ)、鳴動度々、昨日地震度々云々、
十四丑、晴、□刻許地震甚者也、
十六卯、晴、地震了、

〔孝亮宿禰日次記〕

文祿五年○慶長元年閏七月十二日、天晴、今夜亥刻許大地震有之、主上大庭構御座御也、諸家各祗候、御殿所々顚倒、夜明後入御云々、北野經堂、壬生地藏堂、其外民屋方々令顚倒、或死人等多云々、
十三日、天晴、今夜又地震、主上御大庭、諸家各祗候、予參、伏見二丸之女房三百人餘、依地震失命云々、予今夜在禁中、
十四日、天晴、地震猶不休、早旦從禁中退出、
十五日、今夕地震猶不止、參禁中、大庭御假殿在番所、其西方立添云々、
十六日、地震以外也、參禁裏、諸家各祗候、予今夜在禁裏、相番日野大納言、烏丸弁、
十七日、天晴、今朝從禁裏退出、今日猶有地震、大風吹、今夕參禁中番、

十八日、雨降、大風吹、朝間自禁中退出、晩又參番、今夜有大地震、去十六日地震、伏見武家衆家共多顚倒云々、

廿日、雨降、地震有之、

廿一日、晴、參禁裏番、地震于今依不靜、今日加番定番長有之、予加御番內也、

廿二日、天晴、參番、相番花山院中納言、小川坊城、予、地震未休、

廿三日、天晴、從內退出、晩景參番宿也、今夜又有大地震、於殿上被下酒、

廿四日、天晴、自內退出、

廿五日、天晴、朝從內退出、地震有之、

廿六日、雨降、今日大地震有之、

廿八日、天晴、朝自禁中退出、有地震、

廿九日、晴、參番、有地震、

八月三日、晴、今夜參加番、相番勸修寺大、伯、柳權弁、大內記、西洞院、阿野、久我大、予等也、有地震、

四日、天晴、自禁裏退出、晩參加番、有地震、

五日、雨降、入夜大風、參番、有地震、

七日、天晴、今日猶地震有之、去五日雨、勢田橋水越之由風聞、今日參加番、

八日、晴、朝從禁裏退出、地震、

九日、晴、有地震、參番、

十日、晴、自禁中退出、大地震二度有之、

十二日、晴、雷鳴、有小地震、

十三日、晴、參加番、有小地震、

十四日、晴、自禁中退出、地震有之、

十六日、晴、地震兩度、

十八日、今日、有地震、

廿日申、晴、參加番、有地震、

廿二日戌、晴、有地震、參番宿、

廿三日亥、晴、自禁中退出、有地震、

廿四日丑(子カ)、雨、有雷鳴、地震、

卅日午、今朝雨降、有地震、參加番、

九月六日子、晴、地震有之、

七日、有地震、

八日、有地震、

十一日巳、晴、參番、有地震、

十二日、晴、雷鳴、有小地震、

十四日申、晴、參番、有地震、

廿日寅、雨、參番、有地震、

廿一日、有地震、
廿四日、小地震二度、
廿五日未、雨、自禁裏退出、朝晝有小地震、
廿七日酉、晴、參番、有地震、
十月小二日丑、晴、從禁中退出、今朝有地震、
四日卯、晴、地震、參番、
五日、地震三度、
六日巳、晴、未終刻有地震、
七日午、晴、參番、地震有之、
八日未、晴、從禁中退出、有地震、
十五日寅、依召參內、今夜有御日待、宿禁裏、有地震、
十六日卯、天晴、從禁中退出、有小地震、
十七日辰、雨降、參番、今夜有地震、
十九日午、晴、小地震有之、
廿日未、晴、參番、有地震、
廿三日、小地震有之、
廿五日、地震有之、
廿七日、天晴、大地震有之、
十一月小十三日、晴、參番、地震三度有之、
十四日、雨降、有小地震、
十八日、晴、參番、有地震、
十九日、有地震、
廿日、晴、有地震、入夜三度、
廿一日、晴、雪下積、地震、參番、
廿七日、晴、有地震、予從禁中退出、
十二月十日、今日地震以外也、
廿四日、天晴、雪降、亥刻許有大地震、
二年正月四日、晴、度々有地震、
十一日、今夜戌刻有大地震、
十三日巳、晴、入夜有地震、
十六日申、晴、巳刻有地震、
廿二日、地震兩度有之、
二月十二日癸酉、雨降、戌刻兩度有大地震、
十三日、有地震、
十五日丙子、晴、入夜地震、
廿日辛巳、晴、大地震四度、
三月四日乙未、晴、入夜有地震、
四月廿八日、晝有大地震、自北方動、
〔舜舊記〕一名梵舜日記、秘閣本
文祿五年〇慶長元年閏七月十二日、天晴、大地震、子刻動テ數萬人

死、京中寺々所々崩倒了、第一伏見城町已下顛倒了、大佛築地本尊裂破了、北野經堂東堂已下倒云々、

十三日、天晴、内府家康爲見廻、予伏見へ罷越、路次町屋悉破倒了、於路次モ數度地震動了、京中男女至迄、悉外ニ寢了、

十四日、天晴、於智福院夢想連歌興行アリ、予罷也、地震五六度、夜五六度モ動也、

十五日、天晴、地震餘波五六度動了、

十六日、天晴、地震同事也、

十七日、雨降、間晴也、清水寺參詣申了、清水寺外廓、地震故顛倒了、同地震同事ニ動了、

廿九日、地震不相果動也、

〔薩藩舊記後編〕

樺山紹劍自記

一文祿五年丙申閏七月九日薩摩ハ大地震也、京都ハ十二日之夜也、諸屋形町屋などは不及申、金銀を芥(鑛)ばめたる御殿崩テ、數百人打殺畢、〇下略

〔同書〕

年代記

一丙申慶長元年、京小(大カ)坂(大カ)七震動、家モ崩、人モ數萬人死、

〔板坂卜齋覺書〕

(閏脫カ)七月十二日、夜半ニ大地震、大佛を金佛ニ被成候もゆりわり、伏見天守も上の二重ゆりおとし、御殿むなといはふのつくり物きつねがうしおち、うらおもてへ見通し、諸大名家、御成門ともそこね、御城大手の二階門もゆりくづし、一庵法印と申番衆も死、家康公屋敷の二階の長屋つぶれ、かゞ爪隼人も死候、伏見中にて家長屋つぶれ、死人は數しらず、歷々は一庵とかゞ爪と二人なり、地震にて御殿天守、諸大名家共、くづれ(壞損)そんじ、秀吉公以之外御腹立、遊擊〇沈惟敬も夜中に伏見をにげ走候、子細あるべき事也、其段はしらず、

〔增補家忠日記〕

慶長元年閏〇本書脫閏、今補之、七月十二日、夜に入子の刻大地震、土裂け水涌出す、京都、伏見、大厦巨宅及び民屋倒れ破れ、死するもの數をしらず、洛陽大佛殿崩れ、佛像破壞す、伏見の殿中殿舍倒れ崩る、是によりて上臈女房七十三人、中居下女五百餘人横死す、太閤秀吉此殿中に有といえども、此難を避れ、恙なし、大神君御館門樓破倒して、御家人加々爪隼人正死す、愛宕山の坊舍悉く顛倒して、此山にあげ置く家々の名物茶壺、皆摧破して此時に滅失す、

〔當代記〕

閏七月十二日ノ夜子ノ刻ニ、上方大地震、京中ニハ三條ヨリ

下伏見迄家損人死、上京ハ不苦、伏見御城中ニテ、女醋七十三人、中居下女マデ五百人死、一ノ門、三ノ門ノ番衆門崩、悉死、折節太閤中ノ丸ニ御座候テ、御身無恙、諸大名家々倒ル、人死事無限、大坂、堺モ同前、伏見ノ城、殿主(守)石垣ハ一モ不殘崩ル、大佛堂ハ不苦、佛ハ損也、愛宕山坊中モ倒、所々ヨリアガル眞壺(茶カ)過半損、此六七月閏迄モ、上方ハ雨降、五穀豊也、此地震、關東駿河遠州何モ東ハ不動、

(日本西教史)

災異ノ數多アル中ニ、尤モ恐ルベキ害ヲ爲セシハ地震ナリ、同年(千五百九十六年)ノ八月三十日、(慶長元年閏七月七日)大坂ニ於テハ午後八時ヨリ始マリ、九月四日(閏七月十二日)ノ夜半、一層甚シク、事急ニシテ人々家ヲ出ル暇ナク、瓦ノ下ニ埋マレシ者多シ、太閤殿下ノ宮殿ハ大厦高樓盡ク壞レ、彼ノ千疊座敷、並ニ城櫓二箇所倒レタリ、此樓ハ七八層ニシテ各譙樓アリ、近鄕ヲ眺望ス可ク、一層毎ニ其内ヲ美麗ニ金銀ヲ以テ飾リ、此所ヨリ支那ノ使者ニ、十五萬ノ兵ヲ戰隊ニ列子テ示サントシ、此外會同館ノ前ヘ、大石ノ垣ヲ作ラレシガ、是モ地震ノタメニ崩レタリ、地震ハ半時計ニシテ止ミ、死セル者六百餘人、諸所ノ佛堂概子頽破シ、佛僧モ佛像モ、トモニ瓦礫ノ下ニ敷カレ、此地震ノ起ルトキ、大地鳴動シ、恰モ大海ノ飜リ、巨濤ノ岸ニ觸レテ崩ル、ガ如クナリシ、

大坂ニ居タル耶蘇教師、此ノ大變ヲ記シテ云ク、地震ニ先ヅ些時、或ル佛堂ヲ過ギレルニ、一人ノ僧說法ヲナシ、阿彌陀ヲ祈誓スルモノハ、死後ニ幸福ヲ授ケラルナド、巧言ヲ以テ聽衆ヲ感ゼシメ、且ツ彌陀ハ衆人ノ爲メニ安全ヲ願フコトヲ說キ、常ニ彌陀ヲ信ズレバ、救拔セラル、コト疑ヒ無シト云フ、其言終レバ、滿坐ノ人者、聲ヲ發シ、阿彌陀佛ヲ數回稱名ス、然ルニ此時阿彌陀ハ必定坐睡セシナラン、即夜佛堂倒レ、彌陀ノ像碎ケ、微塵トナリ、數多ノ佛僧壓死シ、彼ノ說法人ハ傷ヲ蒙レリ、彌陀ノ死ヲ救ヒシモノハ、此僧一人ノミ、市民ノ恐怖ハ譬フルニ物ナク、家ノ破壞ヲ恐レテ、皆街上ニ立チ、半死半生ノ體ナリシ、

又タ一ノ耶蘇教師、京都ノ事ヲ記セルニハ、九月五日(閏七月十三日)ノ夜十一時、一天能ク晴レシニ、遽カニ大地震起リ、地下ニ雷ノ如キ響聞ヘ、處々家ノ崩ル、音、梁柱ニ壓セラル、叫喚ノ聲、囂々トシテ恰モ大颱ヲ放チシ後チニ、其響ノ鳴リ渡ルガ如クナリシカバ、冥府ノ諸王地下ニ戰フナラント云フ者アリ、奉教ノ人々ハ、教師ノ所用アレバ之ヲ爲ント、我家ヘ馳セ集マルニ、我等ハ地ノ變動スルコト强キヲ以テ、聲ヲ發スルコトヲ得ザル程ナレドモ、諸聖頌德文ヲ唱ヘテ、庭上ニ

跪キ居タリシニ、天帝ノ惠ミニヨリ、幸ニ恙ナキヲ得タリ、京師ニ近キ高名ナル佛堂倒レテ、彼ノ大佛ノ像モ壞レ、（○秀吉創建スル所ノ方廣寺大佛ヲ云フ）其外黃金佛ノ巧ミニ作ルモノ千二百體中ニ、六百體ハ互ニ觸レテ毀損セリ、是レハ則鬼神ノ地下ニ戰ヘル證據ナリト言ヘルトゾ、

其實ハ天帝變災ヲ國中ヘ降シ、此ノ剛慢ナル（フアラオン法老）王ノ暴威ヲ打チ碎キシナリ、（フアラオン王ハエチプト國ノ王ナリ、曾テ天帝ヲ侮蔑シ、イスラエルノ族ヲ苦メシカバ、天帝數多ノ凶變ヲ降シ、之レヲ罰セシコトアリ、作者今此古事ヲ引典トシ、太閤殿下ヲフアラオン王ニ比ス、）又伏見ハ驕奢ノ地ナリ、因テ此地ニ凶變ヲ降セシハ、天帝其怒ヲ示セシナリ、（昔シ那亞ノ子孫相議シテ、塔ノ高サ天ニ至ルモノヲ建テ、名ヲ不朽ニ傳ヘント欲ス、天帝其驕慢ヲ惡ミ、諸人ノ言語ヲ殊異ニス、因テ事ナラズシテ止ム、是レ此ノ事ノ引典ナリ、）此時美麗ナル宮觀、倒レテ殘ルモノナク、太閤殿下ノ平生起臥セシ室ハ、格別宏大美麗ニアラザレドモ、之レモ暫ク動搖セシ後、終ニ破壞シ、侍妾七百人、其下ニ壓死シタリ、殿下ハ地震ノ起ルヤ、急ニ幼兒（○蓋シ秀賴ヲ指ス、）ヲ抱キ走リ出ルニ、稍暫ラクシテ、宮殿ハ瓦石土木ヲ積ミ重子タル一堆ノ山トナリ、善美ヲ盡セル武具家具財寶ニ至ルマデ、其下ニ埋レ、此損失ヲ算スレバ、三億萬金ト云フ、此ノ言ハ甚ダ信ジ難シト雖ドモ、城廓ノ造營ニ、莫大ノ金銀ヲ費セシコトハ、問ハズシテ知ルベキナリ、此諸造營ノ外ニ、地理ノ形勝便宜ニヨリ、山ヲ崩シテ別ニ山ヲ築キシモノ有リ、之レモ或ハ潰レ、或ハ大地ノ裂ケシ所ヘ陷リタリ、

城中ニ殘リシ者ハ庖厨ノミ、太閤殿下姑ラク此ノ所ニ入ラレシガ、平地ハ地震ノ爲メニ裂ルコトアレバ安心ナラズト、黎明ノ頃、或ル山上ヘ避ケ、小柱ヲ立テ、蘆ヲ以テ覆ヒ、內ニ薄板ヲ周ラシ、其面ニ素朴ナル紙ヲ張リシ小屋ヲ作ラセ、暫ラク其所ニ坐臥セラレ、玄以法印其他ノ諸侯二人ノ外ハ、謁見ヲ許サヾリシトゾ、又殿下山上ヨリ我ガ城ノ荒レタル狀ヲ望ミ、斯クノ如キ宏大美麗ノ造營ヲナセシヲ以テ、天ノ惡ム所ト爲リシモ、亦タ理アリト云ハレケルトゾ、然ルニ剛氣ノフアラオン王、其言ヲ守ラズ、地震ノ後チ、再ビ十萬ノ工人ヲ聚メ、此山上ニ於テ新タニ伏見城ヲ築カシメタリ、斯カル凶變ニ際スレバ、無罪有罪ノ人ヲ論ゼズ、共ニ死亡ニ陷ルコトアリ、然ルニ此時上帝特別ノ惠アリシヤ、聖敎ヲ奉ズル人ハ、皆禍難ヲ免レタリ、博多ノ地方ニ於テハ、海水溢レテ陸ニ上ルコト一里餘、家屋ヲ漂ハシ、人畜牛馬ノ死スルコト甚ダ多シト雖ドモ、奉敎ノ人ハ、一人モ命ヲ落サズ、家モ失ハザリシトゾ、又堺ニ於テモ、ジャック、ヒンブラリヨウケイト云フ者、久ク天主敎ヲ信ジ、三十年來其家ヲ諸敎師ヘ貸シテ天主堂トセリ、此地震ノ起リシ時ニ、一家盡ク敎師ハ彌撒ヲ勤ムル所ヘ集リ、經文ヲ唱ヘテ夜ヲ明カシ、其家

ハ三層ナレド、隣家ハ盡ク壞ル、中ニ立テ、些シモ破損セザリシ、

堺モ此ノ天災ヲ免レズ、此地ハ日本國中ニ於テ最モ淫佚奢侈ノ地ナレバ、震災モ亦タ極メテ甚シク、地ノ震フコト三時バカリ、佛堂人家城壁ノ崩ル、響キ、實ニ恐懼スベク、士民盡ク府外ニ逃レ、夜中ノ景色慘憺トシテ、更ニ人ノ恐怖ヲ增シ、家材ニ壓サレテ號泣スルノ聲、四野ニ滿チ、世界モ地中ニ埋マルカト疑ハル、此夜死セシモノ六百餘人、沈游擊ノ從者二十人モ、其中ニアリト云フ、

〔利家夜話〕

伏見地震の時、大納言樣御屋敷と、肥前守樣御屋敷と上下にて御座候、御父子御坪の內江御出被成、直に御言葉を懸合され候、何も〳〵御尤と涙を流し申候、扨大納言樣、小姓衆五六人に被仰付、御城廻りを四方へ、上樣江、御出被成や、大納言呼り候へと申付候と呼申候、太閤樣是を御聞被遊、無事に出たるぞ、心易存じ候へ、大納言(もカ)を無事(にカ)みやと上意也、則罷歸、其段申上候、其日すなはち大納言樣御一人、何の構もなく、御城へ御入被成候、其時太閤樣御機嫌克、秀賴公を利家卿へ御渡し被成候、御抱キ被成候旨物語被遊候、右之御分別、御取紛の時分出候もはと(のカ)、何も感じ申候、

〔細川家記〕

忠興

閏七月十二日、畿內大地震、子の刻比よりゆり出し、大地裂け、水涌出、京伏見の家々數多ゆり崩し、死亡の者數を知らず、洛陽大佛の像なども破裂く、就中伏見城內の地震强して、殿屋倒れ崩れ、上臈女房七十三人、中居下女の類五百餘人橫死せし由也、此砌忠興君奧より御立出、女共出る程に、皆々のき候へと被仰候而、米田助右衞門と(をカ)召され、奧方の事其方へ渡す間、宜く相計い候へと被仰置、伏見の御城へ一番に御かけ付被成候、太閤は帶ときひろぎ御出、興一郎早かりしと被仰、御感あり、つゞいて加藤主計頭淸正被參候、此時女房達壓死にうたれ、人を見懸て助て給へ候と、聲々に呼候得共、聞捨にして御通被成候が、不便なる形勢なりと、御物語なり、

〔慶長甲寅之記〕

慶長元年申ノ七月十三日之夜丑ノ下剋、伏見中大地震、太閤(閏脫カ)(二カ)も伏見に御座候、殿守御殿淀川ゑ悉動崩し、土井石垣(居)も大かたゆりくずし申、諸大名之屋敷より死人の出候事、其限も無御座候、權現樣御屋敷にても、かゞ爪備前守、淺野一庵(一庵ヲ家康ノ家臣ト爲セリ、ト齋覺書及ビ木村又藏覺書記載ト合ハズ、恐クハ非ナラン、但シ又藏覺書、一庵ノ姓氏ヲ橫濱ニ作リ、本書ト違フ、未ダ孰レガ是ナルヲ)○本書、

詳ラカニセズ、動殺され申候、其外少身の者は貳百人餘程も果候由に候、其時權現樣御屋敷ゑ被參候衆、最上出羽守、南部信濃守、御見廻被申候而被歸候は、伏見城中は石垣共に不殘くずし申候間、太閤は御出候事は成まじきと存候間、日本の者の爲にも候、其上未異國も鎭り不申候間、夜明候はゞ、ゆりやみ可申候儘、夜明までは御出被成候事、御無用之由被申候、被罷歸候、

是ヨリ先清正、三成行長等ノ讒スル所ト爲リ、秀吉ノ譴ヲ得テ私第ニ屏居ス、會〻地大ニ震ス、清正從卒三百人ト馳セテ、秀吉ヲ候ス、既ニシテ清正城門ヲ守ル、三成等至ル、清正納レズ、三成之ト爭フ、秀吉之ヲ聞キ、三成ヲシテ入ラシム、明日、秀吉、家康利家等ノ救解ヲ以テ清正ヲ許ルス、

〔木村又藏覺書〕

其夜ハ慶長元年七月十二日之夜也、大地震ゆり候事、二百年三百年にもかゝる例不承、大地震逾月不止、洛中、伏見、大坂は不及言、五畿七道〇言經記ニ近江國ヨリ關東ハ地動無之云々、當代記ニ此地震關東駿河遠州何モ東ハ不動トアリ、本書五畿七道ト曰フハ、誇大ニ失セリ、悉ゆり申候、就中五畿大分ゆり候て、京、大坂、伏見、其外在々所々の家、一宇も不殘たおれ申候に付て、おしにうたれ死するもの、いかほどゝ云數を不知、其夜清正則起上り、てこ共つかい候三百人召連、何れもてこを持せ、御城へ出仕候て、太閤も不斷之御座之間を御出有て、大庭へ被成出、御敷物を敷、幕屏風などにてかこい、大てふちんをとぼさせ、せうぎに腰をかけ、廣庭に御座候、そこへ清正つと被參候得ば、太閤、政所樣、松之丸樣、高藏主、其外御上臈之衆之聲聞へ申候、はや御出被成たると、清正も悅、高藏主々々々と清正被呼候、誰ぞと被答候時、加藤主計頭清正是まで參候、大地震おびたゞしく御座候條、上樣をはじめ、各おしにうたれ候て可有御座と存、參候てはねはづし可申と思ひ、てこのもの三百人に、悉くてこをもたせ參候通、太閤樣へ被仰上候得と被申候、其聲を太閤、政所樣被聞召、扨々はやくも參りたるものかな、氣の付たるいきものにて候と、太閤被思召、政所樣も清正をば御懇に御座候により、御嬉しがり候云々、

〔清正行狀〕續群書類從所載、

（閏脫カ）七月十二日ノ夜、亥子ノ刻ヨリ地震シ、京洛、伏見、大坂ヲ始メ、畿內殊ニ夥シク、殿堂門廡悉ク轉倒ス、清正ハ勘氣未ダ無赦免ト云ヘドモ、力者三百人ニ鐵挺ヲ持タセテ登城スレバ、細川越中守忠興ヨリ外ニハ一人モ未ダ登城セズ、秀吉公ハ大廣間ノ白砂ニ出坐也云々、

〔參陽實錄〕

慶長元年閏七月廿二日〇十二日ノ誤大地震、伏見ノ城隍石壁殿閣等

悉ク崩破シテ、壓死スル者其數夥シ云々、

〔朝鮮太平記〕

慶長元年七月十二日ノ大地震ニ、洛中洛外ハ云フニ及バズ、五畿内ニ在ル處ノ神社佛閣ノ崩レヌルコト、數ヲ知ラズ、中ニモ去ル天正十六年、豐臣秀吉公ノ御建立アリシ、洛東大佛殿方廣寺崩レ倒レ、十六丈ノ盧舍那佛ノ像、悉ク破裂シヌ、太閤此由ヲ聞召サレ、近習扈從ノ輩召具セラレ、御馬ニ召レ、大佛殿ニ至セ玉ヒ、佛像ノ破壞シ玉ヘルヲ御覽ナサレ、釋伽如來ノ像ヲ迹ト白眼ミ、伽藍ニ響キ渡レル大音聲ヲ上テ、夫佛像ヲ安置スルハ、國家ヲ安泰ナラシメンガタメナリ、余若干ノ金銀ヲ抛チ、南都ノ舊規ヲ摸シ、數年ヲ經テ成就シヌ、其志ヲモ思ハズ、汝ガ身ノ大ナルニモ耻ズ、一身ヲ保ツ事ダニ能ハズ、裂摧タルハ何ゾヤ、汝ガ如キ用ニモ立ザル佛ヲ、余信ズルコトアルベカラズト、思フ程惡口シ玉ヒテ、佛像ニ向ヒ、弓ヲ彎矢ヲツガッテ、暫ラク固メテ發チ玉フ、御供ノ人、手ニ汗ヲ握リ、胸ヲ冷シテ、惡逆ノ御身ニ報ン事ヲゾ思ヒケル、

〔義演准后日記〕

八月九日、改元沙汰在之、地震大凶故也、

九月八日、小應司殿、來月改元上卿云々、

十月廿日、傳聞、來廿七日改元治定云々、

廿七日、今日改元慶長云々、○文祿五年ヲ改テ慶長元年ト爲ス、

〔歷朝要紀〕

二十七日庚寅、改元仗儀、皇年代略記係七月誤、

詔察祥瑞而開元、明時之典法、謝咎徵而建號、清代之芳猷、溫故知新、移風易俗、爰時々箸乾象之變異、示君臣之欽、日々有坤儀之動搖、爲老若之勞、嘘呼因朕之非德、無民之安居、一天太平、令下恩惠之宣矣、千村萬落、令誇撫育之榮焉、須退妖災以進號歷、蓋與物更始之義也、其改文祿五年爲慶長元年、大赦天下、今日昧爽以前大辟以下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、皆赦除、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在此限、又復天下今年半徭、老人及僧尼年百歲以上、給穀四解、九十以上三解、八十以上二解、七十以上一解、庶雨弗破壞、野老忘憂、風弗動塵、鬼神無忿、普告遐邇、俾知朕意、主者施行、

慶長元年十月廿七日

同二年七月十六日乙巳、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

慶長二年七月十六日、晴、有地震、

八月六日乙丑、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

八月六日、雨下、有地震、

同月十五日甲戌、京都地震フ、

〔言經卿記〕

慶長二年八月十五日甲戌、天晴、小動、

〔孝亮宿禰日次記〕

十五日、晝有地震、

十月三日辛酉、京都地震稍、强シ、

（義演准后日記）

慶長二年十月三日、雨、過夜地鎭以外也、

（言經卿記）

十月二日庚申、陰晩雨、夜半大地震、

（孝亮宿禰日次記）

十月二日、參極蔺、今夜待庚申、夜明歸家、有地震、

十二月二十六日癸未、是夜、京都地震フ、

（孝亮宿禰日次記）

十二月廿六日、晴、今夜亥刻許地震有之、甚鳴動、

同三年正月六日壬辰、京都地震フ、

（言經卿記）

慶長三年正月六日壬辰、陰晴、小動、

（孝亮宿禰日次記）

慶長三年正月六日壬辰、晴、申刻過地震有之、甚動、

同月十一日丁酉、京都地震フ、

（孝亮宿禰日次記）

十一日丁酉、晴、今夜有地震、

同月十四日庚子、京都地强ク震フ、

（孝亮宿禰日次記）

十四日庚子、今日有大地震、自未申角動、

同月二十八日甲寅、京都地震フ、

（孝亮宿禰日次記）

廿八日甲寅、晴、今日晝有地震、

二月三日乙未、京都地震フ、

（孝亮宿禰日次記）

二月三日乙未、晴、地震有之、

同四年十月三日己卯、是夜、京都地震フ、

（言經卿記）

慶長四年十月三日己卯、天晴、丑刻ニ地震、

同月四日庚辰、是夜、京都地震フ、

（義演准后日記）

慶長四年十月四日、陰、未刻雨降、丑刻地震、

同月五日辛巳、京都地震稍、强シ、

（義演准后日記）

五日、雨、辰初刻大地震、兩日相續、

十一月五日辛亥、京都地震フ、

〔義演准后日記〕

十一月五日、晴、寅刻地震、

〔言經卿記〕

十一月五日辛亥、天晴、寅刻地震、

同五年六月十三日乙酉、陸奥國岩木山、火ヲ噴キ砂石ヲ飛ス、山南燒ケ崩レ、津輕近傍、地大ニ震フ、

〔津輕一統志〕

慶長五庚子年六月十三日、大地震、晝以如夜、小石交ノ砂降、同十五日晴ル、此時岩木山南ノ方燒崩ル、

同六年二月七日丙子、是夜、京都地震フ、

〔言經卿記〕

慶長六年二月六日丙子、天晴、戌刻地震、

四月十四日壬午、京都地震フ、

〔義演准后日記〕

慶長六年四月十四日、大雨、午刻地震、

同七年二月二十四日丁巳、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

慶長七年二月廿四日、天晴、申刻地震、去□日ノ夜半過ニモ動、

三月十五日丁丑、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

三月十五日、天晴、地震、

同月十九日辛巳、是夜、京都地震フ、

〔言經卿記〕

慶長七年三月十九日辛巳、天晴夜雨、亥刻地震、

〔時慶卿記〕

十九日、天晴、夜半巳前地震動、

同月二十六日戊子、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

廿六日、雨天、地震少動、

五月二日癸亥、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

五月二日、地震午申兩刻少動、

同月三日甲子、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

三日、天晴、地震未刻ニ鳴動、

同月十八日己卯、京都地二回震フ、

〔時慶卿記〕

十八日、天晴、地震巳刻、又酉刻ニ動、

六月十二日壬寅、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

六月十二日、天曇、辰刻地震鳴動、

同八年三月十五日壬申、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

慶長八年三月十五日、地震卯刻少動、

四月二十八日甲寅、是夜、江戸地強ク震フ、

〔慶長見聞書〕

今年○慶長八年卯月廿八日之夜、大震動、

〔慶長見聞錄案紙〕

慶長八年四月廿八日、今夜大地震、（年錄作地震）年錄云、其後大震動、

五月二十八日甲申、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

五月廿八日、巳刻計ニ地震鳴動、

十一月二十七日己卯、是夜、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

十一月廿七日、初夜地震少、

十二月二十一日癸卯、是夜、京都地震稍、強シ、

〔時慶卿記〕

十二月廿一日、丑刻ニ地震大動、

同月二十二日甲寅、京都地震稍、強シ、

〔時慶卿記〕

廿二日、天晴、大寒ニ入、地震巳刻ニ大也、

同月二十三日乙卯、京都又震フ、

〔時慶卿記〕

廿三日、曉天又地震少動、

同九年二月十二日癸巳、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

慶長九年二月十二日、天曇、霎、地震未刻動、

五月六日丙辰、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

五月六日、申刻計リ地震少動也、

六月十三日壬辰、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

六月十三日、午刻地震、

同月二十五日甲辰、京都地震フ、

〔時慶卿記〕
廿五日、天晴、午刻地震少動、

同月二十六日乙巳、京都又震フ、

〔時慶卿記〕
廿六日、天晴、晩ニ暴風雷鳴、地震少、

七月十七日丙寅、京都地震フ、

〔時慶卿記〕
七月十七日、地震辰刻ニ大ニ鳴動、

同月二十一日庚午、是夜、京都地震ヒ、明曉又震フ、

〔時慶卿記〕
廿一日、天晴暑甚、此曉京中騷動、地震可動由沙汰アリテ、禁裡女院御所無御寢由、局ヨリ被告知、小童女房衆ハ不被信シトイヘ共起出、宵ニ少動、明テ又小動、天曇、巳刻ニ晴、

同月二十五日甲戌、京都地震フ、

〔時慶卿記〕
廿五日、天晴暑甚、巳刻計ニ少地震動、

八月四日壬午、京都地震フ、

〔時慶卿記〕
八月四日、地震巳刻ニ動、

十一月十一日丁亥、京都地震フ、

〔時慶卿記〕
十一月十一日、天晴、朝ハ雨也、酉刻ニ地震鳴動、

十二月十四日己未、是夜、京都地震フ、

〔時慶卿記〕
十二月十四日、天晴、寒、初夜ニ地震、

同月十六日辛酉、薩摩、大隅、土佐、遠江、伊勢、紀伊、伊豆、上總、八丈島等ノ諸國嶼、地大ニ震ヒ、海嘯ヲ颺ゲ、人家ヲ漂倒スルコト算ナシ、

〔義演准后日記〕
慶長十年正月六日、霽、昨日相國寺允長老、留主居良首座江音信、舊冬十五日(六カ)武藏國江戸邊大地震之由注進候、此邊不覺、誠聊震歟、〇下文義久文書、當代記、崇福寺古記、皆十六日ニ作ル、本書十五日トナス、疑フクハ傳聞訛ヲ致スナラン、

〔薩藩舊記後編〕
在樺山氏
追而上洛之儀に付、此頃至鹿兒島御談合に而候ぎ、其時分我等越あひ、樣子承候、いかにしても父子上洛之調難成由候、

爰許之儀其方存知之前候、乍去公儀に者かへがたく候間、成成にも可有之歟、何としても我等四月者可罷上内意候、畢竟三月之御禮義に御禮申後候而者、咲止之由、出合父子上洛と有之事候、願者駿州公儀を被相償やうに候者、三月よりは暖氣にも成候はん間、三月爰許を打立候ずる、左候はゞ四月者可致上着之條、愚老罷上、御禮等も相濟やうに有度候、殊更當國覺外之儀候、去十六日、東目より西目之浦濱大浪よせきりやみ事者不及申人もたゞうち取候、誠不思議之災難に候、○東目西目由來記、舊典類聚ニアリ、今之ヲ檢スルニ、東西分界ノ處、分明ナラズト雖モ、大抵鹿兒島ヲ以テ中心トシ、薩摩地方ヲ西目トシ、大隅地方ヲ東目ト爲スモノニ似タリ、如斯候間題目者か子有之まじき由候、況父子上洛候者、かね一圓調まじき由候、云鈴云恰、父子之上洛難調候、何とぞ駿州へ被遂内談可然候、將又少將殿在洛のうち、竹屋江刀とがせ度之由候て差上候、則被仰付たる由候、然共其已後音なしに候、無心元候、其方前より被相理出來候はゞ、可被指下候、次此一紙公界に被出まじく候、恐々謹言、

慶九歟十二月十九日　　龍伯花押

樺山權左衞門殿○本書他事ニ渉ルト雖モ、提綱シ難ヲ以テ分割セズ、

〔當代記〕

慶長九年十二月十六日戌刻、丑刁ノ方ニ魂打三度、同地震、其夜自關東上者、今切之東舞坂ニ宿、右之魂打ト聞ヘケレバ、俄ニ大波來テ、橋本ニ家百間程有所ニ、八十間計潮引テ行、纔二十間計殘ケル、人多死、折節舟ニ乘合ケル者、荷物ヲハネ、舟ハ山際ヘ打上ゲル、其時釣ニ出ケル舟廿艘計、行末不知、此時伊勢國浦々潮數町干タリケル事一時計也、漁人モ魚鮑已下心ノ儘ニ取所ニ、潮俄ニ來テ、大石モ浦々ヘ打上ゲル間、生テ歸者ナシ、其内ニ年老ノ者ハ、如何樣不審ニ思、急デ陸ヘ上者ハ少々生テ歸モ有ケル、右之波ノ打上ゲル石ニ、鮑已下或五十或七八十有ケル、島々口口人屋、又兵糧ノ藏以下船網、無殘所潮ニ流テ、行末不知、關東モ此波同前云々、二百四十四年先、康安元年辛丑○正平十六年七月廿四日、攝州難波浦ニ如斯ノ儀有ケル由、太平記ニ在之、大波之比、伊勢山田岡本七百間餘燒失、馬多死、紀伊國四國西國何モ同前也、地震ハ所々ニヨリ有大小、關東モ同前、上總國小田喜領海邊取分大波來テ、人馬數百人死、中ニモ七村ハ跡ナシト云々、諸國内海ハ不苦、攝州兵庫之浦ハ一圓不苦、是ハ先年丙申○慶長元年ノ地震、他所ニ超過シケル故カト、所ノ者申候、

〔伊豆國八丈島宗福寺古記〕朝野舊聞裒稿所載、

慶長九年十二月十六日之夜、津浪登リ、谷ヶ里之在家不殘浪ニ被取、人五十七人死ス、内拾七人、中之鄉小島之人也、此時島中田畑過半損亡ス、

〔八丈島記事〕

慶長九辰年ゟ當御代御領地ニ相成、奥山縫殿之助代官役被仰付、

慶長九年十二月十六日、津浪上リ、谷ヶ里之在家、不殘浪ニ被拂、人七拾五人（宗禍寺古記、五十七人ニ作ル、）果る、並ニ島中田畑過半損亡ス、此年ゟ御年貢多く減る、

〔東照宮實紀〕

慶長九年十二月十六日、今夜遠江國舞坂邊高波打あげ、橋本邊の民家八十ばかり、波と共に海に引入られ、人馬死傷少からず、釣船は廿艘ばかり踪迹を失へり、その時伊勢の海濱は數町干潟となり、魚貝あまた其跡に殘りしをみて、漁人等是をとらんと干潟にあつまりしに、又高波俄に打上て、漁人等皆沈沒せり、伊豆の海邊、みなこの禍にかゝりし、中にも八丈島にては、民家悉く海にしづみ、五十餘人溺死し、田圃過半は損亡し、上總國小田喜は、と更濤聲つよく、人馬數百死亡し、七村みな流失す、攝津國兵庫邊は更に害なしとぞ、（當代記、崇福寺古文書、）

〔續本朝通鑑〕

慶長九年十二月丙午朔、辛酉（十六日）、武藏、相摸兩國地大震、海濱溢、溺死者多、辛未（廿六日）武相二州地又震、癸酉（廿八日）晝俄闇、

〔孝亮宿禰日次記〕

慶長十年正月十八日巳、

近日關東大地震有之、死人等多云々、又伊勢國、紫國等有大地震云々、

〔置文寫〕（土佐國群書類從所載、）

安藝郡崎之濱談議所之僧阿闍梨曉印

于時慶長九甲辰年、國々諸難立起之事、夫我朝天地開闢、神武天皇以來百十一代之御帝之御時、將軍太閤秀吉公之御息秀賴公御年十三、御幼少故、三河國松平家康公、日本一之弓取也、秀吉公御他界之刻、秀賴公御幼少之間、家康公江御代を被預讓給ふ、則公家に被成、內府と號し、爲御世納、改日本之將軍に奉仰傅給ふ事無比類間、尾張國山內對馬守殿と申御侍、土佐國を御知行被成、一國御靜謐に治玉ふ、當時崎濱代富永賴母佐殿（官脫カ）と申、生國近江之侍也、慶長九年如何成年之逆旅ぞや、先一番に七月十三日、不時頓に大風吹來り、洪水湧、山之竹木を吹倒し、諸之作物、根葉を枯し、家微塵に吹なし、山は河となし、淵河は山と埋れ、人之首も吹切るほどの大風なれば、深山幽谷之土民等、木におされて死るもあり、或は半死半生の消息、凡國土の人民何計萬無計、二番に八月（三番に脫カ）四日大風洪水、濱の砂を吹上、閏八月廿八日に又大風洪水

す、四番十二月十六日之夜地震す、其夥夜半に四海波の大潮入て、國々浦々破損滅亡す、崎濱老女男女五十人、波に流死す、其内代官之下代攝津國山田之庄郷山田助右衞門、蓋如何なる過去の酬ぞや、夫婦息子流死す、歎きても餘りあり、無殘成哉、糸惜哉、愁傷悲歎之涙也、隣在所を聞くに、西寺東寺の麓の浦分にも、男女四百人餘死す、野根浦は佛神三寶の加護哉らん、潮不入、七不思議といふべし、宍喰に老若男女貴賤三千八百六人死す、蓋傳へ聞に、南向の國は皆潮入、西北向之國は地震計にて潮不入、未來永代の言傳に書置者也、其時當所の庄屋安岡彦左衞門一類は、一人も不死、末繁安穩也、談議所之住持讃岐國福家之出生權大僧都阿闍梨曉印、此置文を記置者也、潮入所は談議所之履脫迄、中里鍛冶二郎右衞門坪迄入、川は船場名本之前迄入、八幡宮の御權前高欄迄打詰、

慶長九甲辰年

〔三災錄附錄〕土佐國群書類從所載

又谷陵記に、寶永以前慶長九年の大變は、僧の曉印記錄の畧に見えつるまゝを記したれば、其書見まほしくて探り求つるに、頃日一書を得て見るに、紙數二三枚の物にて、いかにも筆記の畧なれば、後世散失の程を察し、左に如へ置ぬ、文體可笑事多しといへども、其實は見へて、殊勝に覺ゆ、其世の質朴おもひやるべし、

于時慶長九甲辰國々諸難立起事、

夫我朝天地かいべき神武天皇以來、百〇代御時、將軍太閤秀吉之御息秀頼と申、御年十三歲、幼少故、三河國松平家康と申は、日本第一之弓取也、然ル間太閤秀吉御他界刻ニ、秀頼御幼少之間、御世を家康江被預讓給ひて、公家になされ給ひて、内府と申、御世を爲納、日本の將軍と成給ふ、加之我朝握恣掌中、諸國大名小名奉師傅たもふ事無比、去間尾張國山内對馬守殿と申御侍、土佐國御知行取せ給ひて、一ッ國靜謐に納給ふ、當時崎濱の代官對馬殿御内富永頼母殿と申御侍、代官仕給ふ、于時慶長九年甲辰、先一番、七月十二日不時に大風吹來り、洪水あそひ出、竹木根葉を吹切、家は戸壁吹散シ、山へ河ニ成、淵川山と埋れ、人の首を吹切、あるひは死、あるひは半死、二番に初八月四日に大風洪水又する也、三番、潤八月廿八日ニ大風洪水又する也、四番ニ十二月十六日夜、頓而地しんす、其時夜半ばかりに四海浪ス、大鹽入て國々の浦々を破損し、崎濱にも男女五十人余浪に死、御代官下代に津の國山田助右衞門殿と申侍夫婦ふ浪に被取、朝の露ときへ給ふ、あわれ哉、かなしひ哉、東寺西寺の浦々は、男女四百人余死

す、甲浦は三百五拾人余死、宍喰ニは三千八百六人余死、此時野根の浦は、佛神三寶の加護にやあらん、鹽不入、大成不思議也、東は請南を請たる國は大汐入、西を請北を請たる國國は、心動地しん計ニ而鹽いらず、是も未來永々之言傳に書置もの也、

一右之時、在所庄屋安岡吉右衛門之一類ハ、少しも取おとし無之、末繁昌に安穩也、談議所に讃岐國福家の住人權大僧都曉印と申客僧居合、有爲目を見、則此置文作る筆者也、汐の入所は談議所の阿彌陀堂のつの木の上迄入、中里かぢ次郎右衛門はつぼ迄入、河は船持の名本の出川原迄入、八幡の大權現のらんかんの北檀を打つふるなり、畢、

文化四年十一月、公事ニ因テ東行シ、崎濱ニ至ル、偶間暇ヲ得、遂ニ談議所ノ在ル所ヲ問、里長寺田六兵衛分一役所ヲ指テ示ス、予且阿闍梨ガ記錄今猶存スル乎否ヲ問ヘバ、古記有トテ、則出シテ示之、因テ謄寫ス、是谷陵記ニ所謂阿闍梨曉印ガ記錄ト云モノ也、

宮崎　高門　識

〔谷陵記〕土佐國群書類從所載

崎濱談議所ノ住僧權大僧都阿闍梨曉印ガ記錄略ニ曰、

慶長九年災多シ、先一ニ七月十三日大風洪水、二ニ八月四日大風洪水、三ニ閏八月廿八日又大風洪水、四ニ十二月十六日夜地震、同夜半ニ大潮入テ、南向ノ國ハ盡ク破損ス、西北向ノ國ハ地震計ト云、當所ニハ五拾人溺死、西寺東寺ノ麓ニハ四百人、甲浦ニハ三百五拾餘人、宍喰ニハ三千八百六人溺死ス、野根浦ヘハ潮不入、不思議ト云ベシ、當所ノ潮ハ當寺ノ履脫ヲ限リ、或中里鍛治ガ庭、川ハ船場名本ガ家ノ前、又ハ八幡宮ノ高欄迄打詰ルト云々、右ノ潮、此度寶永四年ニカハルコトナケレドモ、夜分故溺死多キ歟、

〔按〕以上ノ諸書ニ據テ、慶長九年十二月十六日ノ地震海嘯ハ毫モ疑フベキナシ、然ルニ左ニ揭グル二書ハ、之ヲ慶長六年ト爲シ、編年史料モ亦之ヲ揭錄セリ、今兩者ニ就テ相對照スルニ、同一ノコトタル明ナリ、若シ慶長六年ニ果シテ此大地震アリトセバ、二書ノ外、正確ナル當時ノ記錄ニ散見セザルノ理ナシ、且房總治亂記ハ素軍記ナレバ、誤ナキヲ保セズ、武江年表ハ後人ノ述作ナレバ、當時ノ記錄ノ如ク正確ナル者ニ非ズ、今斷ジテ左ノ二書ノ記事ヲ以テ、慶長九年ノコト、爲シ、六年ハ九年ノ誤ト爲ス、

〔房總治亂記〕

慶長六年十二月十六日、大地震、山崩海埋テ岳トナル、此時安房、上總、下總、海上俄ニ潮引テ、卅餘町干潟トナリテ、二日一夜也、同十七日子ノ刻、沖ノ方夥ク鳴テ、潮大山ノ如クニ卷上テ、浪村山ノ七分ニ打カクル、早ク逃ル者遁レ、遲ク逃ル者ハ死タリ、先潮災ニ逢シハ、邊原新宮濱澤倉濱、小湊內浦尼津濱萩前原磯村名太尼浦大夫崎江見和田白古邊楯骨戸横桶御宿岩和田岩舟矢指戸小濱澁田日安里和泉東浪見一ノ宮名萩一松牛込反金阿負濱方貝不動堂、都テ四十五ケ所也、

〔武江年表〕

慶長九年十月○房總治亂記十二月ニ作ル、十六日、大地震、房總の山を崩し、海を埋、丘と成、又海上俄に潮引て、三十餘町干潟と成る、十七日、潮大山の如く卷上、流死夥し、

同十年二月十日乙卯、駿河國府中、地震フ、

〔當代記〕

慶長十年二月十日之夜丑刻ニ、魂打歟トン、、ト五六度鳴、其後ハタ、、ト云事夥シ、

〔附錄〕

〔當代記〕

七月廿二日三日比、三川鳳來寺山夥動搖、衆徒彼山滅亡歟之由ヲ存、本堂ヱ打寄居ス、

七月十二日乙酉、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

慶長十年七月十二日、天晴陰、涼風立、地震巳下刻、

十一月二十七日丁酉、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

十一月廿七日、天晴、卯刻地震鳴動、

同十一年六月一日戊戌、江戸地二回震フ、

〔慶長日記〕

慶長十一年六月朔日、巳尅終地震、同申尅終亦地震、

同月三日庚子、江戸地震フ、

〔慶長日記〕

三日、辰時少地震、○當代記同ジ、

同十二年一月六日庚午、江戸地震强シ、

〔當代記〕

慶長十二年正月六日、江戸大地震、但他國者不動、江戸計也、

〔武德編年集成〕

慶長十二年正月六日、江都大地震、且大雪、

同月二十日甲申、江戸地震フ、

〔慶長年錄〕朝野舊聞裏稿所載

慶長十二年正月廿日、江戸大地震、上方は不震、

二月六日己亥、是夜、江戸地震フ、

〔當代記〕

二月六日、夜半江戸地震、上方ハナシ、

四月二十九日辛酉、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

慶長十二年四月廿八日庚申、小雨下、夜半過有地震、

六月十三日甲戌、駿河國府中、地震フ、

〔當代記〕
六月十三日、此日駿府ハ地震ス、

同十四年一月十六日己亥、陸奥國津輕、地震フ、
〔津輕舊記〕
慶長十四年正月十六日、曉地震、

五月八日戊子、京都地震フ、
〔時慶卿記〕
慶長十四年五月八日、天晴、晩ニ雨、申刻ニ地震少動、

九月十九日丁酉、是夜、京都地震フ、
〔時慶卿記〕
九月十九日、天晴、地震夜半前ニ大ニ動、
〔孝亮宿禰日次記〕
慶長十四年九月十九日丁酉、晴、曉方地震有之、

十一月二十一日己亥、是夜、京都地震フ、
〔時慶卿記〕
十一月廿一日、天晴、初夜ニ地震少動、

同十五年一月十八日乙未、陸奥國津輕、地震フ、
〔津輕舊記〕
慶長十五年庚戌正月十八日、四時地震、工藤家記、

二月七日甲寅、京都地震フ、
〔時慶卿記〕
慶長十五年二月七日、天曇後晴、辰刻地震動、

十一月十三日甲寅、京都地震フ、
〔時慶卿記〕
十一月十三日、天晴寒、午過ニ地震振動、

同十六年一月十一日壬子、京都地震フ、
〔東寺執行日記〕
慶長十六年正月十一日、申刻過地震、

二月二十二日癸巳、是夜、駿河國府中、地震フ、
〔當代記〕
慶長十六年二月廿二日、亥刻地震、

八月二十一日戊子、岩代國會津、地大ニ震フ、
〔當代記〕
八月廿一日、奥州會津邊大地震、石垣悉崩、塀櫓以下悉落、殿守破傾、瓦以下落、人馬多死、近邊山崩、川ノ流ヲ留、依之知行二萬石餘湖水トナル、他國此地震無之、中ニモ柳津本堂倒、在家多コロビ、山崩、是ハ偏飛驒守佛神ヲ蔑如シ、任我意、其天罰ノ謂ト云々、

〔會津四家合考〕

慶長十六年辛亥八月廿一日、辰刻會津大地震、會津川下流山崩塞焉、故洚水汎濫、而欲浸耶麻、蜷川秀行長臣岡半兵衞、野野左近、籍于郡中集役夫、下流而不日通焉、水盡涸、然下濕之地、餘水相湛爲湖、稱曰山崎湖、自寛永末年之頃、漸々水涸、皆爲菑畠矣、此地震楊津堂崩入河、並塔寺觀音堂崩倒、

〔續年日記〕

慶長十六年辛亥八月廿一日、辰刻大地震、別テ會津ハ天地開闢以來ノ大地震也、城下ハ不及曰、大寺柳津塔寺、新宮如法寺、法用寺等ト寺院佛閣、神社堂塔震倒、或ハ大破、其外城石垣崩埋、堀家中ノ家土藏門戸倒、町家民家夥倒、會津川下流山崩川ヲ塞グ、水湛事三日三夜、郡中村々家ニ水附浮流事夥、依之秀行ノ長臣岡半兵衞、野野左近、其外大勢出デ、郡中ノ人足數萬人集テ、爲堀ケレ共無甲斐、此時山崎之湖水出來ル、其餘截川塞溪成沼、或ハ川旱潟ト成リ、山亦成川所多シ、於會津大平邑五分一邑程窪村泥潟山邑二ツ栗村小杉山黑澤麻生大栗山砂子原牧澤湯八木澤大嶺小野川小中津川下中津川大蘆蛆喰沼山沼平山口水引栗生澤楢原大內氣多宮蕪中ノ沼、此時出來タル也、熱鹽温泉湖沒、又名入邑ノ內高清水戸板平ノ山夥崩テ塞、只見川三日不流、水上ニ湛事、宮崎村迄溜ル、其崩塞タル所、川中ニ大石共不流シテ在、川中後名ニ高瀨ト魚ヲ取、依テ寛永五年ニ役銀二匁宛永代定役ト成、亦利田瀧坂モ如此魚ヲ取ル、亦瀧谷邑岩谷岩城山三分二崩塞川、七日水不流、砂子原小鹽澤迄湛、此時今ノ村居ニ砂上リ、成平地故、民家移ス、

〔柳津圓藏寺雜記〕史料編纂掛岩代採訪本○寺ハ岩代國河沼郡柳津村ニアリ、

慶長十六年辛亥八月廿一日辰之下刻、郡中大地□(震々)就中、此地岩巒崩裂シ而、佛殿函丈僧房民屋悉ク倒覆ス、人モ亦多ク壓死ス、洪水渺瀰于山中、及水之涸、凡歷代之經籍寶器等、悉漂流也、

〔駿府記〕

慶長十六年八月廿五日、去十三日、會津大地震、蒲生飛驛守秀之(行)城郭、石壁以下悉震崩云々、

〔武德編年集成〕

慶長十六年八月廿二日、奥州會津大地震、巳ノ刻猪苗代四萬石ノ地陷リ湖トナル、死歿スル男女三千七百餘、是多々美川埋ル故也、會津風土記ニ見ユル、

○駿府記十三日ニ作リ、編年集成廿二日ニ係グルハ、共ニ誤レリ、

〔新編會津風土記〕

河沼郡

塔寺村八幡宮

慶長十六年八月廿一日、大地震シテ、末社鳥居廻廊舞殿釣殿觀音堂二王門ノ類、一時ニ頽顛シ、只本社ノミ殘リシヲ、

同十七年蒲生氏ニ請、士民ヲ勸メ、僅ニカタバカリノ營ヲナス、○前後略

同郡

柳津村虛空藏堂別當圓藏寺

慶長十六年地震暴水アリテ、屋宇漂流シ、此寺モ災ニ罹リ、多ク經卷什寶ヲ失ヘリ、其翌十七年春、又大地震アリテ、寺ノ(守カ)後山崩レ、僧房ヲ破リ、看寺ノ僧二人ヲ壓殺ス、

〔參考〕

〔新編會津風土記〕

耶麻郡

猪苗代湖　猪苗代ノ南ニアリ、周十七里計、耶麻安積會津三郡ヲ浸ス、半ヲ限リ本郡ニ屬ス、中ニ島アリ、翁島ト云、相傳テ、大同元年暴ニ漲レリト云、澄波鏡ノ如ク、遠嶂空ニ聳ユ、朝夕ノ變態一ナラズ、實ニ一方ノ勝槩ナリ、○下略

日橋川　其源ハ猪苗代湖ヨリ出○中略館原村ノ南ニテ只見川ニ合シ、水流益サカンニシテ大谷組ニ入、西海枝村ノ端村一竿ノ邊ニテハ、兩岸ヨリ岩石相ツカ子、廣僅二十間計、戸中村ヨリ吉田組ニ入、杉山村ノ東ニテ奥川來注ギ、西流シテ越後國蒲原郡鹿瀬組ニ入、此川ニ五ノ小名アリ、戸口村ノ邊ヲ戸口川ト云、大寺村ノ邊ニ至リ日橋川ト云、赤枝村ヨリ下ヲ堂島川ト云、鶴沼川ニ合シテ大川トナリ、只見川ニ合シテヨリ揚川ト云、凡テコレヲ日橋川ト云、耶麻河沼二郡ノ間ヲ流レ、曲折數回ナレドモ、大抵東ヨリ西ニ流ル、封内ノ諸流、皆コレニ會ス、封内第一ノ大川ニテ、所謂會津川ナリ、會津川ヲヨメル歌、古今六帖ニ、

心ニモアラテワタリシ會津川、憂名ヲ水ニウツシツルカナ、　貫之

河沼郡

只見川　大沼郡瀧谷組ヨリ北ニ流テ牛澤組ニ入、小野川村ノ北ニテ、小野川コレニ注ギ、柳津村ニテ銀山川ヲ過ギ、和泉村ヨリ野澤坂下兩組ノ間ヲ東北ニ流レ、宮月村坂下組河井村野澤組ノ間ニテ、日橋川ニ合ス、廣六十間計、此川山間ヲ經テ兩涯高ケレバ、田地ニ漑グベキ便ナシ、巖石多ク急流ナリ、サコ川サイノ類ヲ産ス、年魚多シ、

十月三日己巳、是夜、駿河國府中、地震フ、

〔當代記〕

十月三日、戌刻小地震、

同月二十八日丁酉、三陸、地大ニ震ヒ、仙臺及ビ南部、津輕、松前諸領ノ沿岸、海嘯ヲ颺グ、

〔駿府記〕

十一月晦日、松平陸奥守政宗献初鱈、就之政宗領所海涯人屋波濤大漲來、悉流失、溺死者五千人、世曰津波云々、本多上野介言上之、此日政宗爲求肴遣侍二人、則此者驅漁人、將出釣舟、漁人云、今日潮色異常、天氣不快、難出舟之由申之、一人者應此儀止之、一人者請主命不行、誣其君者也、非可止而終漁人六七人强相具之、出舟數十町時、海面滔天大浪如山來、

消失肝失魂之處、此舟浮彼波上、不沈、而後至波平處、此時靜心開眼見之、彼漁人所住之里邊山上之松傍也、（是所謂千貫松也、）則繫舟於彼松、波濤退去後、舟在松梢、其後彼者漁人相共下山至麓里、一宇不殘流失、而所止之一人、所殘漁人、無遁者沒波死、政宗聞此事、彼者與俸祿、政宗語之由、（○朝野舊聞哀藁に、按ずるに貞享松平陸奥守書上には、政宗使者の物語を承るとあるを是とす、）後藤少三郎於御前言上之、仰曰、彼者依重其主命、而免災難、退得福者也云々、此日、南部津輕海邊人屋溺失、而人馬三千餘死云々、

〔朝野舊聞哀藁〕

貞享（松平陸奥守）書上曰、二十八日巳刻過、政宗領内大地震、津波入、千七百八十三人相果申候、

又曰、右之趣（按ずるに是より以上の文、駿府記に同じければ略す、）駿府政事錄に相見へ申候、手前にては委細不存候得共、十貫（千カ）松と申所は、名取郡岩沼（邊カ）近にて、海邊一里餘之所に御坐候、右之所に舟を繫候と申松御坐候由にて、左候得ば、實正と相見申候、尤高山にて、中々巔迄津波など入申山にては無之候、麓之儀と相見申候、右津波は十月廿八日、國元大地震、津波入候時分之儀にて可有御坐候、

日記摘要十一月條　日、仙臺津輕邊津波して、人民多溺死、

○此條、駿府記十一月晦日ノ條ニ載ス、蓋追書ニ係ル、今貞享書上ニ從ヘリ、

〔松前家譜〕

慶長十六年十月、東部海嘯、民夷多ク死ス、

同十七年二月二十日乙酉、是夜、駿河國府中、地震フ、

〔當代記〕

慶長十七年二月二十日ノ夜、戌刻地震、

十月二十五日乙酉、讃岐國地强ク震フ、

〔讃岐大日記〕

慶長十七年十月廿五日、大地震、

十一月十三日壬申、江戸地震フ、

〔當代記〕

十一月十三日、未刻地震、

同十八年十月一日乙酉、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

慶長十八年十月一日、地震辰刻少動、

十二月二十三日丙子、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

十二月廿三日、天晴、今曉地震鳴動、

同十九年四月十五日丁酉、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

慶長十九年四月十五日、天晴、午雷鳴、朝地震少、

同月二十二日甲辰、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

廿二日、地震鳴動、辰刻也、

七月二十三日甲戌、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

七月廿三日、天晴陰晩大雨、未刻地震鳴動、

八月二十五日乙巳、是夜、駿河國府中、地震フ、

〔當代記〕

慶長十九年八月廿五日、丑刻地震、

九月六日丙辰、是夜、府中又震フ、

〔當代記〕

九月六日、雨、駿府殊大雨、及丑刻地震、

十月二十五日戊辰、越後國高田、地大ニ震ヒ、海波ヲ颺グ、是日、相摸、紀伊、山城諸國、亦震ヘリ、

〔時慶卿記〕

十月廿五日、地震午下刻太動ヿ帶タヾシ、暫不靜、〇中略地震ノ御見舞ニ、禁中、院中、女院御所、女御御方ヘ、以使者申入、無御別義ト政所ヘ以使者申候、一乘院殿御座候由候、又以使者申候、

廿五日、切々將軍塚鳴動、

〔孝亮宿禰日次記〕

慶長十九年十月廿五日甲辰、晴、未刻有地震、

〔慶長見聞書〕

慶長十九年十月廿五日、小田原御泊、此日大地震、

〔當代記〕

十月廿五日、大地震、午下刻、然モ家康無顛倒(屋カ)、京都二條御所ヘ五山衆彼是出仕シテ被居廣間ケルニ、天水ノ桶落タリ、其砌右之出家衆、依地震庭ヘ被出ケル折境、件之桶之水、彼人人ノ首下ニ掛リケル間、見苦カリケル粧ナリ、

〔續年日記〕

慶長十九年十月廿五日、大地震、別越後國高田領大震、人死多、津波モ揚打、

〔長澤聞書〕

慶長十九年十月廿五日ニ大地震、其外樣々の事共、年之內有之候、

〔萬代記〕紀伊採訪本

慶長十九年甲寅十月廿五日、大地震、

元和元年一月三十日丁丑、京都地屢震フ、

〔義演准后日記〕

慶長二十一年○元和元年正月晦日、雨、戌刻地震、此中度々也、占文如何、

六月一日丙子、江戸地強ク震ヒ、家破レ地裂ク、

〔駿府記〕

元和元年六月八日、最上駿河守家親飛脚到來、去朔日午刻江戸大地震、家破地割云々、

〔慶長日記〕朝野舊聞裒藁所載、

元和元年六月朔日、江戸表大地震、舍屋到レ、死傷多シ、

七月十四日戊子、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

元和元年七月十四日戊子、晴、未刻地震有之、自丑寅角動、

同二年一月十八日己丑、是夜、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

元和二年正月十八日己丑、晴、夜半地震有之、

七月二十八日丁酉、陸前國仙臺、地強ク震ヒ、城壁樓櫓毀損セリ、

〔譜牒餘錄〕

○伊達、

元和二年七月八日巳下刻、政宗國許大地震、居城石壁櫓等破損仕候、

九月十六日甲申、是夜、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

九月十六日甲申、晴、丑刻地震有之、

十月十日丁未、京都地震フ、

〔泰重卿日次記〕

元和二年十月十日、雨天、昨夜之餘滴也、破曉之比地震鳴動也、時雨陰晴也、

同三年一月三十日丙申、京都地震フ、

〔泰重卿日次記〕

元和三年正月卅日、今朝雪一寸ほど積歟、晴天、入夜霰降也、地震有音、

十一月三十日辛卯、夜半、下野國地震フ、

〔寒松日記〕

元和三年十二月朔日、昨夜々半地震、

同四年四月二十七日乙酉、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

元和四年四月廿七日乙酉、雨降、曉有地震、

八月十二日戊辰、京都地震フ、

〔泰重卿日次記〕

元和四年八月十一日丁卯、雨天、御會漢和聯句、御製和漢共被遊候、予和一句仕候、丑刻地震甚、主上清涼殿まで出御也、予冠許着、御前召候間致伺公候、終夜地震之故不寐候、

〔時慶卿記〕

元和四年八月十二日、天晴、夜中大雨、寅刻ニ地震久動、

〔孝亮宿禰日次記〕

八月十一日丁卯、曇風雨、曉地震、

○地震ハ十二日ノ曉ナリ、本書、十一日曉ニ係ルハ蓋、誤ナラン、

同六年一月三日壬午、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

元和六年正月三日壬午、晴、曉地震有之、入夜雨降、

四月五日癸丑、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

四月五日癸丑、雨下、今日有地震、

〔泰重卿日次記〕

元和六年四月五日癸丑、申刻地震有音、

七月十四日庚寅、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

七月十四日庚寅、晴、辰刻有地震、

九月二十一日乙未、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

九月廿一日、酉刻有地震、

同八年十月十六日戊寅、是夜、京都地二回震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

元和八年十月十六日戊寅、戌刻地震兩度有之、

〔續史愚抄〕

元和八年十月十六日戊寅、地震大動、資勝卿記、○史料編纂掛本資勝卿記ニ所見ナシ、

十一月十八日庚戌、是夜、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

十一月十八日庚戌、晴、子終刻地震、並將軍塚鳴動、

十九日辛亥、將軍塚鳴動、

寛永元年五月四日丁巳、下野國强震アリ、

〔寒松日記〕

寛永元年五月大四日、快晴、夜半大地震、庄内古老不覺云々、

九月二十九日庚辰、是夜、京都地震フ、

〔資勝卿記〕

寛永元年九月廿九日庚辰、晴、初夜時分地震大ニユル也、

〔孝亮宿禰日次記〕

寛永元年九月廿九日庚辰、晴、酉刻地震兩度有之、

同二年七月五日辛亥、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

寛永二年七月五日辛亥、晴、地震有之、

九月二日戊申、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

九月二日戊申、晴、曉有地震、

同月三日己酉、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

三日己酉、雨下、有地震、

同四年一月二十一日己丑、江戸地強ク震フ、

〔東武編年要錄〕

寛永四年正月廿一日、大地震、

〔江城年錄〕

寛永四年正月廿一日、大地震、

〔温故年表〕

寛永四年卯丁正月廿一日、東國大地震ス、

〔續史愚抄〕

寛永四年正月廿一日己丑、地震云、（年代略記本朝年代記）

二月二十三日辛酉、是夜、京都地震フ、

〔資勝卿記〕

寛永四年二月廿三日辛酉、晴夕雨、丑刻地震、

六月一日丙申、是夜、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

寛永四年六月一日丙申、晴雨下、入夜地震、

同五年一月十七日己卯、是夜、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

寛永五年正月十七日己卯、晴、丑刻地震、

五月一日辛酉、是夜、京都地震フ、

〔資勝卿記〕

寛永五年五月一日辛酉、晴、午刻過曇、日ノマハリニ虹立、初夜時分地震、

〔續史愚抄〕

寛永五年五月一日辛酉、午剋有虹遶日、（按非虹、是抱璚之屬、）地動、（長曆、資勝卿記、晉書、）

同月十六日丙子、江戸地震フ、
（孝亮宿禰日次記）
五月十六日丙子、曇、午刻有大雨、地震、○當時、孝亮、江戸ニ居レリ、

同月十八日戊寅、江戸地震稍、強シ、
（江城年錄）
寛永五年五月十八日、大雨、辰の刻大地震、是より霖雨、
（寛明日記）
寛永五年五月十八日、甚雨、大地震、○萬年記同ジ、

七月十一日庚午、江戸強震アリ、城壁崩レタリ、
（江城年錄）
七月十一日、午剋大地震あり、御城石垣方々崩、足利學校寒松、物語被申候は、卅三年以前、伏見に而今日大地震あり、廿三年以前にも今日大地震、今年又如此之物語也、

同六年閏二月十五日辛丑、京都地震フ、
（時慶卿記）
寛永六年閏二月十五日、申刻ニ地震、

同月十六日壬寅、是夜、京都地震フ、
（時慶卿記）
十六日、亥刻計ニ地震、

六月二十七日辛巳、京都地震フ、
（時慶卿記）
六月廿七日、今曉寅刻計ニ地震鳴動、
（泰重卿記）
寛永六年六月廿七日辛巳、晴、此曉丑刻許地震、家宅動搖驚騷、

同月二十八日壬午、京都地震フ、
（時慶卿記）
廿八日、今曉又地震、

十月二十二日癸酉、京都地震フ、
（資勝卿記）
寛永六年十月廿二日癸酉、曉地震アリ、
（時慶卿記）
十月廿一日、曙地震、○廿二日ノ曙ナリ、
（孝亮宿禰日次記）
寛永六年十月廿一日壬申、初雪降、寅ノ刻地震、○寅刻ハ廿二日ノ曙ナリ、

同七年六月二十三日辛未、是夜、江戸強震アリ、
（本光國師日記）
寛永七年七月四日、松首坐六月二十五日之狀來、六月廿三日

之夜、江戸大地震之由申來、

〔視聽日錄〕

寛永七年六月廿四日、昨夜地震ニ付、爲御機嫌伺、水戸殿より飯田新右衞門被差上之、其後登城、

一西丸昨夜地震ニ付、爲御機嫌伺、水戸殿ヨリ伊藤玄蕃被差上之、其後登城、

〔江城年錄〕

寛永七年六月廿三日、大地震、天より毛降、

〔武江年表〕

寛永七年六月廿三日、大地震、毛降、

〔細川家記〕

忠利

寛永七年六月廿三日夜、江戸大地震之事、忠利君より江戸へ被仰上候趣等、七月十七日之内、

森右近殿煩ニ付而、爲見廻飛脚差下申候間、致言上候、小崎四郎左衞門罷下候ニ、六月廿五日之御書頂戴仕候、

一兩上樣、一段御息災被成御座候由、目出度奉存候事、

一六月廿三日子之刻時分、其元大地震ゆり、西之御丸御門口石垣少々崩、塀などもちと損申候由、扨々驚奉存候、其刻ハ御下屋敷へ被成御座、少もいづかたも損不申候由、御上屋敷は少々しらかべなどおち、塀もゆりわり申候へ共、先以被成御座候へる所、御無事に御座候而、珍重奉存候、我等屋敷も無事之儀、奉得其意候事、

七月十七日

貴田半左衞門殿

十二月十三日戊午、江戸地震フ、

〔江城年錄〕

十二月十三日、地震、

同月二十三日戊辰、江戸地震稍、强シ、

〔江城年錄〕

廿五日(ニカ)、大地震、戌刻光物飛行、大音あり、

〔武江年表〕

十二月廿三日、大地震、戌刻光物飛行し、其音すさまじかりし、

○德川實紀、本書ヲ引キ二十二日ニ係グ、蓋、別本ナラン、

同九年一月二日庚子、江戸地震フ、

〔寛明日記〕

寛永九年正月二日、未ノ刻地震、

同月十三日辛亥、京都地震稍、强シ、

〔時慶卿記〕
寛永九年正月十三日、地震巳刻大動、
〔孝亮宿禰日次記〕
寛永九年正月十三日辛亥、晴、午刻許有地震、
二月七日乙亥、京都地震フ、
〔時慶卿記〕
二月七日、地震未下刻、
六月十七日癸未、江戸地震稍、強シ、
〔寛永日記〕
寛永九年六月十七日、酉刻地震甚、（御日記）
八月二十九日甲午、江戸地震フ、
〔寛永日記〕
八月廿九日、申刻地震、
九月二日丁酉、江戸地震フ、
〔寛永日記〕
九月二日、晴天、卯後刻地震、
十月二日丙寅、江戸地震フ、
〔寛永日記〕
十月二日、晴、申上刻地震、

同月二十七日辛卯、江戸地震フ、
〔寛永日記〕
廿七日、晴天、卯下刻地震、
十二月三十日癸巳、江戸地震フ、
〔寛永日記〕
十二月晦日、晴、辰刻地震、
同十年一月二十一日甲寅、相摸、駿河、伊豆諸國、地大ニ震ヒ、相摸最モ甚シ、小田原城市破壞シ、箱根山所々崩ル、是日江戸モ亦震ヒ、餘震月ヲ越エタリ、
〔大内日記〕
寛永十年正月廿六日、去廿二日之御狀參着、去廿一日之晩（曉カ）、江戸大地震ノ由申來ル、
〔資勝卿記抄〕
寛永十年二月四日、自江戸申來、小田原ハ正月廿一日之地震ニ、多分ツブレ申候、箱根ノ山ノ石クヅレ出、路惡由也、
〔孝亮宿禰日次記〕
寛永十年正月廿三日丙辰、晴、未刻有地震、（○此地震ハ京都ナリ、）
二月七日己巳、晴、小田原有地震、家數多顚倒、死人百五十人

許有之云々、今日從江戸上洛人所語也、

卅日壬辰、晴、晩雨降、伊豆國あた見の湯依大波破滅云々、江戸大地震有之由風聞、

〔寛永日記〕

寛永十年正月八日、辰刻地震、

廿一日、卯上刻地震、有時又震、辰下刻震、巳刻甚震、巳後刻又震、午後刻震、未下刻震、此間少宛之震數多也、雖然營中無異儀、

一就地震、諸大名辰上刻登城、無御目見、謁老臣退去、〇寛永錄之ニ同ジ

廿二日、寅下刻地震、

廿三日、寅刻少地震、巳刻甚震、

廿五日、寅下剋地震、

廿六日、巳後刻地震、申後刻又震、酉剋少震、亥刻震、有時又震、

二月十日、戌刻地震、

十四日、未刻地震、有時亦震、

〔江城年錄〕

寛永十年正月廿日、明方七ッ半大地震、〇二十日夜ノ明方ノ意ナリ

廿一日、大地震、相州小田原大地震、民家數千間倒、其後毎日度々地震、同廿六日申ノ刻大地震、人多死、小田原之町、一里之内、家一ッもなし、

廿二日、大地震少ヅ、六度、夜三度、

〔細川家記〕

忠利

寛永十年二月十三日、三齋君へ被仰上候御書之内、

江戸地震之事、具に申來候、江戸は一日に三度四度ゆり申候、小田原之町屋不殘つぶれ候、城も矢倉も殘不申、箱根山も方々崩申候、三島は不苦候、吉原は家くづれ、地もわれ申候、事外成大地震と申候事、

〔元寛日記〕

寛永十年正月二日、晴天、朝寅ノ下刻諸國大地震、就中、相州小田原驛宿悉壓潰ス、不殘民屋一宇、往還ノ旅人宿原野、大地震故、大地裂破り、大而涌出泥水、崩下箱根山巖石、塞道路、往來不輙、旅人驛馬、爲巖石若干被打殺、穿岩渡溪川之底於再返暫爲道、故絶馬之通路、荷物一箇負之、其代金一歩宛、歩行不叶、負人ノ代金亦同、其外輕少之荷物隨其品、此所ニ往還ル旅人、布令敷錢、自將軍家被命稻葉丹後守、頓作道、往還得自由云々、世話ニ云、伊豆國三島大明神社外稻葉丹後守領分之内ニ、號三島神木有大木杉、其廻リ尋ト云々、丹後守被切之、皆曰是神木也、稻葉申云、此木非社中、有吾領分、何ゾ

爲神木、則切之、自木血流、遁出小蛇、小田原中ノ輩見之者多シ、有如何ト皆人怪之、切之後不過三日、有大地震、城中多門矢倉門塀石壁湟壘、悉ク令破壞、剩三島小田原兩町並在々所所民屋迄、不殘一宇令顚倒ノ中ニ、於三島明神社中者、雖小社無恙、所ノ鄕民見之、鳴舌テ恐神威之新、○寛明日記、天享東鑑、寛明事跡錄、並ニ之ニ同ジ、

〔慶延略記〕

寛永十年正月二日、寅下刻關東大地震、就中、小田原箱根驛亭、悉壓潰、

〔御當家紀年錄〕

寛永十年正月廿一日、江戸大地震、關東諸國亦大動、就中相州小田原最甚矣、城郭破損、市店悉顚倒、箱根山壞、

〔家乘略〕

寛永十年正月廿二日、一昨廿日卯刻大地震ニ、小田原町屋悉倒、男女千人餘死、箱根之山道崩、絶道路、

廿五日、地震三度、

廿六日、申中刻、同夜同貳度、

廿七日、同三度、

〔武江年表〕

寛永十年正月廿一日、廿二日、諸國大地震、小田原は別きて強し、

同廿六日、申刻大地震、

〔温故年表〕

寛永十年癸酉正月廿日、相州小田原大地震、怪我人夥、牛馬多死ス、

○元寛日記、寛明日記、寛明事跡錄、慶延略記、並ニ是月二日ニ係グ、蓋、誤レリ、今寛永日記、大内日記等ニ從ヘリ、

〔老人覺書〕

寛永癸酉年正月廿日、晩(曉カ)寅刻に大地震ゆり申而、人馬數多死申候、家之儀は壹ツも不殘、それより小田原町わり御座候、是城普請に、古より有松木を切申たるによつてと申ならはし候、此木は北條三代目氏康公のかみおきの松と申候、それゆへか小田原城石垣かゝり候者は、皆々はて申候、城主丹後守殿○稻葉丹後守正勝、十一年正月廿五日卒ス、御煩に而御果可被成候、奉行黑川八左衞門、高野へ參候町人大坂之米屋彌左衞門御せいばい、江戸八町堀石屋甚兵衞、籠者之上おやこ御せいばい、京之者盛甫と申者は江戸はらはれ申候、是は根來多兵衞と申者、石垣坪數ぬすみ申候と訴人仕候故也、乍去右之松木切申候罰ニ而皆々死申候由に候、

同月二十三日丙辰、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

廿三日丙辰、晴、未刻有地震、

四月十日辛未、江戸地震フ、

〔寛永日記〕

四月十日、申上刻地震、同時雷電甚雨、○寛永錄之ニ同ジ、

十月十五日甲辰、江戸地震フ、

〔寛永日記〕

十月十五日酉刻、地震、

同十一年四月九日乙丑、京都地震フ、

〔孝亮宿禰日次記〕

寛永十一年四月九日乙丑、晴、今日地震有之、

同十二年一月二十三日乙亥、江戸強震アリ、

〔寛永日記〕

寛永十二年正月廿三日、午下刻地震甚、依之諸大名登城、

〔資勝卿記抄〕

寛永十二年正月廿六日戊寅、去廿三日午刻、江戸大地震之由、今朝飛脚來、

〔大内日記〕

寛永十二年正月廿七日、今日次飛脚江戸ヨリ參候、去廿三日午下刻、江戸大地震致シ候事御注進ニテ、則次飛脚被□(遣カ)候、但板倉周防守留守居方迄、狀箱並宿次手形を添候て遣申候、

〔萬年記〕

寛永十二年正月廿三日、甚地震、

〔細川家記〕

忠利

寛永十二年正月廿九日、大坂ニ御着船、三齋君に被仰上候御書之内、

一正月廿三日、朝晩兩度、近年無御座地震ゆり申候由、從江戸申來候、御城中御無事、三齋樣御屋敷、我等屋敷無事、長や之塀などは少宛損申由候事、

一御城並雅樂守うしろのあたり塀は落申候事、

一廿四日に、增上寺へ御成候處、廿三日之地震に、大名衆罷立候石燈籠、何レもころび申候處、三齋樣御立被成候石燈籠、我等立申候石燈籠計、ころび不申候、念を入故と、何れも被申たる由に候事、

〔江城年錄〕

寛永十二年正月廿五日、寅卯刻大地震、午未刻又大地震、○武年表同ジ、

〔貞山公治家記錄〕

寛永十二年正月廿四日丙子、寅刻大地震、辰刻少シ震ル、午下刻又大ニ震、

○江城年錄、地震ヲ廿五日ト爲シ、治家記錄、廿四日ト爲ス、並ニ誤レリ、

六月十八日丙申、江戸地震フ、

〔寛永日記〕

六月十八日、辰下刻地震、御普代(譜)面々登城、無御目見、

八月二十五日癸卯、江戸地震フ、

〔寛永日記〕

八月廿五日、晴天、巳ノ刻地震、

九月三十日丁丑、江戸地二回震フ、

〔寛永日記〕

九月晦日、午後刻地震、申上刻甚震、

十一月二十七日甲戌、是夜、京都地震フ、

〔康道公記〕

寛永十二年十一月廿七日甲戌、晴、戌刻地震、

同十三年一月十五日辛酉、江戸地屢〻震フ、

〔寛永日記〕

寛永十三年正月十五日、未ノ刻甚地震、申ノ刻震、子刻震、暫時有テ震、

同月十六日壬戌、江戸地三回震フ、

〔寛永日記〕

十六日、子刻地震、寅刻兩度地震、

同月十七日癸亥、江戸地晝夜三回震フ、

〔寛永日記〕

十七日、卯下刻甚地震、申刻ニ又地震、子下刻地震、

八月五日丁丑、江戸地震フ、

〔寛永日記〕

八月五日、昨夜亥上刻より丑刻迄大風頻、寅剋地震、

九月三十日辛未、江戸地二回震フ、

〔寛永日記〕

九月晦日、午上刻地震、酉下刻地震良久、

十月一日壬申、江戸地兩次震フ、

〔寛永日記〕

十月朔日、晴、巳刻地震、午刻地震、

同月三日甲戌、江戸地震フ、

〔寛永日記〕

三日、晴、未刻地震、

同月十七日戊子、江戸地震フ、

〔寛永日記〕

十七日、未刻地震久、

同十四年七月十日丙子、是夜、江戸地震稍、強シ、

〔寛永日記〕

寛永十四年七月十日、亥下刻甚地震、諸大名少々登城、謁奏者番衆御目付中退去也、

八月三日己亥、江戸地震稍、強シ、

〔寛永日記〕

八月三日、卯上刻地震甚、

就今朝地震、諸大名登城、

同月十日丙午、是夜、江戸地震フ、

〔寛永日記〕

十日、子下刻甚地震、

同月十一日丁未、江戸地震フ、

〔寛永日記〕

十一日、巳上刻地震、

同月二十九日乙丑、江戸地震フ、

〔寛永日記〕

廿九日、戌下刻少地震、

同十六年十一月、越前國地大ニ震ヒ、福井城石壁毀損セリ、

〔家乘略〕

寛永十七年正月十六日、

去年卯霜月、越前ニ大地震ゆり候て、北之庄の城損申候に付、破損仕(修理脱カ)候へよし(き脱カ)被仰出候、

○地震ノ日、缺ケテ未ダ詳ナラズ、又古今類聚越前國志、福井松平家譜ヲ閲スルニ、並ニコノ震災ヲ載セズ、

同二十年四月二十九日壬辰、江戸地震フ、

〔寛永日記〕

寛永廿年四月廿九日、申刻地震、

地震ニ付、紀伊殿より御機嫌伺使者被遣之、

十月二十六日丁亥、江戸地震フ、

〔寛永日記〕

十月廿六日、今朝地震ニ付、紀伊殿ゟ番頭登城、被伺御機嫌、

正保元年一月六日己未、京都地震フ、

〔道房公記〕

寛永廿一年(正保元年)○正月六日乙未、陰晴不定、午刻地震、

同月十九日戊申、是夜、京都地震フ、

〔道房公記〕

十九日戊申、陰晴不定、風雨入夜雪降、丑刻地震、

三月六日甲午、京都地震フ、

〔續史愚抄〕

正保元年三月六日甲午、地震、（番衆所記、）

是月、下野國地震ヒ、日光山東照宮ノ石垣少シク損ゼリ、

〔家乘略〕

正保元年三月九日、日光地震にて石垣など少破損仕候由被爲聞、中根壹岐守（正盛、側衆、）見せに被遣候、

〔德川系譜〕

○大猷公

三月、日光山地震、中根正盛往視、

○震災ノ日ハ、諸書ニ見ル所ナシ、姑ク是月ニ係ケタリ、

七月三日己丑、京都地震フ、

〔道房公記〕

七月三日己丑、天陰、卯刻地震、

〔尙嗣公記〕

正保元年七月三日己丑、天晴、地震、

〔續史愚抄〕

七月三日己丑、地震、（番衆所記、）

九月十八日癸卯、羽後國本莊、地震强ク、城市毀損セリ、

〔尙嗣公記〕

十月廿四日己卯、天晴、（中略）又傳聞、六合（郷）伊賀守（政勝）居城、（羽後國由利郡本莊）九月十八日、大地震、破損云々、

○重脩譜、六郷家譜等、コノ震災ヲ逸セリ、

同二年一月十九日癸卯、江戸地震フ、

〔大猷院實紀〕

正保二年正月十九日、この日地震せしかば、三家使して御けしきうかゞはる、（日記、水戸記、）

同三年四月二十六日壬寅、陸前、磐城二國、地大ニ震ヒ、仙臺、白石二城ノ城壁破損セリ、是日、江戸モ二回震ヘリ、

〔正保錄〕

正保三年四月廿六日、依地震御連枝方其外諸大名御旗本之面々登城、

〔大猷院實紀〕

正保三年四月廿六日、地震兩度あり、よて家門並諸大名まう

のぼり、御けしきを伺ふ、この日の地震、奥羽の邊ことに甚しく、仙臺の城破損せしとぞ、（榊原日記）

〔義山公治家記錄〕

正保三年四月廿六日壬寅、辰刻大地震、

廿八日甲辰、夜仙臺ヨリ飛脚參着、去ル廿六日ノ大地震ニ、御城石壁數十丈頽レ、三階ノ亭櫓三ツ顚覆シ、其外破損許多ノ由註進アリ、白石城モ石壁櫓破損スト云々、

十一月十五日丁巳、京都地強ク震フ、

〔道房公記〕

正保三年十一月十五日丁巳、晴、寅刻大地震、近年希有也、

同四年五月十四日甲寅、武藏、相摸兩國、地震フコト強ク、江戸城々壁及ビ馬入川渡船場等破壞シ、東叡山金造大佛ノ頭搖落セリ、

〔正保錄〕

正保四年五月十四日、卯上刻甚地震、其後度々震、

在江戸之諸大夫、（名カ）御旗本之面々群參、是地震甚而也、

紅葉山並增上寺御宮御佛殿、地震ニ付テ破損樣子、爲見分御使被遣之、

京大坂並豐後長崎其外所々在番御横目有之國々江、地震之義爲令知之、以次飛脚奉書被遣之、

尾張亞相江爲上使松平伊豆守（信綱）被遣之、是今朝甚地震、其後度々震候付而、今日御目見義御延引、然上ハ重而震候共、御目見登營無用之由、被仰遣之、

紀伊亞相江　石川播磨守（總長）

尾張亞相江　北條右近大夫（氏利）

水戸黄門江　伊澤隼人正（政信）

右之通、今朝地震ニ付テ登城、就其被遣之、

〔御徒方萬年記〕

正保四年五月十四日、未明ニ地震、諸大名、並惣役人中、早朝ニ出仕、

〔家乘略〕

正保四年五月十四日、朝卯上刻近年希有之夥大地震、卯ノ半刻ニ又地震、御城御數寄屋近所之石垣五六間破損、東叡山之大佛御頭崩落、同日地震動事六七度、夜中小動兩三度、十五日、午刻申ノ刻兩度、

〔寛明日記〕

正保四年五月十五日、小雨降、諸大名出仕、御目見有之、昨卯ノ刻地震夥シ、御城破損、人馬死ス、（寛明事跡錄、同ジ、）

〔慶延略記〕

正保四年五月十三日、寅下刻大地震、同十四日卯下刻又震動、五十年卅年ニも稀也、御城御多門塀破損仕ル、侍屋舗大破損多シ、則時大名諸役人爲伺御機嫌登城、十三日寅刻より十四日午刻過七度地震、

〔聽訴秘錄〕

正保四年五月十三日、當地大に地震す、御城並諸大名之屋敷破損多く、人死する事少からず、

〔天享吾妻鑑〕

正保四年五月廿一日、雨降、雷少シ鳴、去ル十四日卯ノ刻地震ニ、大名屋敷破損シ、人馬多死スル由也、

〔武江年表〕

正保四年五月十三日、江戸大地震、上野大佛の像破す、

〔泰平年表〕

正保四年五月十三日、江戸大地震、御城並大名屋敷破損、

○聽訴祕錄及ビ武江泰平二年表、十三日ニ係グルハ誤レリ、且慶延略記ニ十三日寅下刻トアレドモ、寅刻ハ既ニ十四日ノ昧爽ナレバ、ソノ誤辨ヲ待タズ、

〔正保錄〕

五月十九日、今度地震ニ付、增上寺台德院殿崇源院殿御廟所石瑞籬、並所々石燈籠倒ニ付、如元可申付之旨、八木勘十郎、○守直高木筑後守○正次被仰付趣、松平伊豆守傳上意之趣也、

六月二日、今度地震之節、所々石垣破損ニ付而、修復被仰付之趣、從老中奉書被遣之、所謂西丸御櫓下、並西之土橋的場曲輪、戸澤右京亮、○盛政西丸永井日向守○直清屋敷之向は、堀左門、糀町御門脇角石垣、内藤金一郎、○忠興紅葉山御宮之後、本多八郎兵衛、○勝行神田橋は杉原帶刀、○重玄織田源十郎、○秀一吳服橋と鍛治橋兩所は、佐久間權之助○勝豊也、

六日、今度地震付而、石垣破損修覆奉行被仰付之、所謂

津田平左衛門、○正重使番、　蒔田數馬、○長廣使番、

加藤平内、○光定書院番、　長谷川三左衛門、○守勝小姓組、

被仰付之、阿部四郎五郎義は、先年御普請奉行仕候間、右之面々指南可仕之旨被仰出之、松平伊豆守被申渡之、

廿四日

松平阿波守○忠英

登城、是此度麹町口、田安口升形、地震破損修復之石垣被仰付之御禮也、是連連依望如此云々、

十二月八日、去頃地震之節、所々石垣以下就破損、修復之義、松平阿波守、○忠英戸澤右京亮、○政盛古田兵部少輔、○重恒本多八郎兵衛、○勝行堀左門、○直吉内藤金市郎、○忠興織田源十郎、○秀一杉原帶刀、○重玄遠山久太夫、○友貞大關右衛門、○增周佐久間權之助、○勝豊京極飛彈守、○高直小笠原主膳、○貞信細川豐後守、○興隆稻葉淡路守、○昭通酒井河内守、○忠清被仰付之處、令出來ニ付而、右之家老物頭下奉行之輩、白銀綿衣被下之、伊豆守傳之、奏者御番渡之、所謂

松平阿波守内

銀五拾枚　家老　稻田九郎兵衛

小袖三、羽織、　同　山田豐前

同斷

銀三拾枚　番頭　山崎圖書

小袖二、羽織、　同　鳥左兵衛

同斷

銀二十枚　物頭（勘定）　稻田八郎右衛門

小袖二、羽織、

同斷
同斷
同斷
銀十枚
小袖二、羽織、
同斷
同斷
同斷
同斷
同斷
戸澤右京亮内
銀三拾枚
小袖三、羽織、
銀貳拾枚
小袖二、羽織、
銀拾枚
小袖二、羽織、
同斷
古田兵部少輔内
銀三十枚
小袖二、羽織、
銀二十枚
小袖二、羽織、
銀拾枚
小袖二、羽織、
右同斷
本多八郎兵衛内
銀三十枚

同　同　杢右衛門
下泰行　津田大膳
中尾又右衛門
寺澤助兵衛
同　堀　源左衛門
金田金左衛門
數川源兵衛
關　九郎兵衛
立木四郎兵衛
家老　戸澤甚兵衛
家老脇　兒玉角内
下泰行　戸澤理右衛門
同　天野八右衛門
家老　古田左兵衛
家老脇　鯰江太郎右衛門
下泰行　山中久兵衛
同　中西五左衛門
家老　輕津伊織

小袖二、羽織、
銀二拾枚
小袖二、羽織、
銀拾枚
小袖二、羽織、
同斷
堀左門内
銀二十枚
小袖二、羽織、
銀十枚
小袖二、羽織、
同斷
同斷
内藤金一郎（内脫カ）
銀二拾枚
小袖二、羽織、
銀拾枚
小袖二、羽織、
同斷
織田源十郎内
銀二拾枚
小袖二、羽織、
銀拾枚
小袖二、羽織、
杉原帶刀内
銀二拾枚
小袖二、羽織、
銀拾枚

物頭　遠藤角助
下泰行　大藤角太夫
同　三枝安兵衛
家老　堀　四郎兵衛
下泰行　岡本仁右衛門
同　窪　清兵衛
同　同　助右衛門
家老　杉山權左衛門
下泰行　鳥留源兵衛
松村又兵衛
家老　溝口次左衛門
下泰行　梅本左太夫
家老　和田半兵衛
下泰行　本木九郎左衛門

小袖二、羽織、
遠山久太夫内
銀二十枚
小袖二、羽織、
銀十枚
小袖二、羽織、
佐久間權之助内
銀二十枚
小袖二、羽織、
銀拾枚
小袖二、羽織、
京極飛彈守内
銀二拾枚
小袖二、羽織、
同斷
同斷
銀拾枚
小袖二、羽織、
同斷
小笠原主膳内
銀二十枚
小袖二、羽織、
銀拾枚
小袖二、羽織、
同斷
大關右衞門内
銀二拾枚
小袖二、羽織、

家老　小倉猪右衞門
下索行　宇佐美久左衞門
家老　小野三太夫
下索行　後藤兵右衞門
家老　高木甚左衞門
同　坂本藤右衞門
同　沼田專左衞門
下索行　生駒善左衞門
同　安藤三郎右衞門
家老　津　與惣兵衞
下索行　井田傳左衞門
同　福井彦左衞門
家老　大久保彌次右衞門

同斷
銀拾枚
小袖二、羽織、
同斷
細川豐前内
銀二十枚
小袖二、羽織、
同斷
銀拾枚
小袖二、羽織、
同斷
稻葉淡路守内
銀拾枚
小袖二、羽織、
同斷
同斷
酒井河内守内
銀三十枚
小袖二、羽織、
銀二十枚
小袖二、羽織、
同斷

同　大江助之丞
下索行　人見權左衞門
益子茂左衞門
家老　中村將監
同　沼田内膳
下索行　藤本長左衞門
同　久世所左衞門
下索行　牧野源左衞門
同　武井彌三右衞門
同　瀧野加兵衞
家老　籠谷主水
物頭　太田又左衞門
同　石田彌右衞門

突筑後丹後同子黃金綿衣被下之、伊豆守傳之、是石垣御普請ニ付而依罷下也、

〔人見私記〕

五月十九日、今度地震ニ付、增上寺台德公崇源院殿御廟石ノ瑞籬、並所々石燈籠倒ニ付、如元可申付旨、八木勘十郎、○守直高木筑後守、○政次被仰付旨、信綱申渡ス、

廿二日、且今度地震ニ付、所々破損修復奉行兩人被仰付、○小性頭島正利、大番丸毛利忠、

六月二日、今度地震ニ付、所々石垣破損修復被仰付旨、自老中奉書出、所謂西丸御櫓下、並西ノ土橋的場曲輪、戸澤右京亮、西丸永井日向守屋敷ノ向、堀左門、糀町御門脇角石垣、內藤金市郎、紅葉山御宮後、本多四郎兵衞、神田橋、杉原帶刀、○重玄織田源十郎、吳服橋、鍛冶橋、佐久間權之助、

廿四日、松平阿波守登城、地震ニ付、石垣普請被仰付候御禮也、是連々御普請被仰付候樣願ヒニ依テ也、

六日、今度地震ニ付、石垣破損奉行、津田平右衞門、蒔田數馬、加藤平內、長谷川三右衞門被仰付、次ニ安倍四郎五郎、○正之儀、先年御普請奉行勤ル ニ付、右ノ者共ヘ指南可申旨上意ノ旨、信綱申渡ス、

七月朔日、諸大名下馬邊迄出仕ノ所、七夕近ク、其上甚暑ニ付、無御禮ノ間、不及登城旨申達ス、且酒井河內守、今度御數寄屋方石垣普請被仰付、爲溫氣ノ砌ノ間、香需散被下旨、河內守ヘ重次申達ス、

八日、忠勝並忠秋重次被召出、御用談被遊、且相州馬乳舟渡ノ場、去比地震破損修復爲見分、片桐石見守○貞昌被遣、傳馬御朱印御扶持方被下旨、老中等申渡、

十二月八日、去比地震ニ付、石垣以下破損修復、大名松平阿波守始十六人ヘ被仰付、出來ニ付、家老物頭奉行等迄、御褒美被下、信綱申渡ス、

同月二十五日乙丑、是夜、江戸地震フ、

〔寛明事跡錄〕

正保四年五月廿五日、戌刻地震、老中皆登城、

同月二十九日己巳、江戸地震フ、

〔寛明事跡錄〕

廿九日、天曇リ南風吹、申ノ刻地震、酉ノ上刻暴雨雷鳴、所々ニ落ル、戌刻ニ雷雨晴、

八月五日癸酉、江戸地震稍、强シ、

〔家乘略〕

八月五日、曉方夥敷地震、

同月二十七日乙未、江戸地震フ、

〔家乘略〕

廿七日、巳之刻半過よほど地震、

大日本地震史料　卷之五　終